

# Adobe® LiveCycle® ES3 のトラブルシューティング

## **法律上の注意**

法律上の注意については、[http://help.adobe.com/ja\\_JP/legalnotices/index.html](http://help.adobe.com/ja_JP/legalnotices/index.html) を参照してください。

# コンテンツ

## 第1章：このドキュメントの内容

|                     |   |
|---------------------|---|
| このドキュメントの対象読者 ..... | 1 |
| このガイドで使用する規則 .....  | 1 |
| 追加情報 .....          | 2 |
| サポートの利用方法 .....     | 3 |

## 第2章：インストールおよびデプロイメントのトラブルシューティング

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| インストールに関する考慮事項 .....               | 4  |
| 必要システム構成に関する考慮事項 .....             | 4  |
| アプリケーションサーバーに関する考慮事項 .....         | 5  |
| データベースの初期化に関する考慮事項 .....           | 6  |
| セキュリティに関する考慮事項 .....               | 7  |
| アップグレードに関する考慮事項 .....              | 7  |
| PDF Generator の考慮事項 .....          | 9  |
| インストール、設定およびデプロイメントに関する問題 .....    | 10 |
| アプリケーションサーバーのトラブルシューティング .....     | 13 |
| LiveCycle データベースのトラブルシューティング ..... | 15 |
| ログファイルを使用したトラブルシューティング .....       | 16 |

## 第3章：管理タスクのトラブルシューティング

|                         |    |
|-------------------------|----|
| ログインに関する問題 .....        | 21 |
| パフォーマンスに関する考慮事項 .....   | 23 |
| アンインストールの問題 .....       | 27 |
| 出力エラーのトラブルシューティング ..... | 28 |
| その他のエラー .....           | 33 |

## 第4章：エラーメッセージのトラブルシューティング

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 一般的なエラーメッセージ .....       | 37 |
| データベースのエラーメッセージ .....    | 46 |
| LiveCycle エラーメッセージ ..... | 48 |
| クライアント側のエラーメッセージ .....   | 49 |
| その他のエラーメッセージ .....       | 49 |
| CQ のトラブルシューティング .....    | 50 |

# 第 1 章：このドキュメントの内容

このドキュメントには、Adobe® LiveCycle® Enterprise Suite 3 (ES3) の実稼働環境で発生する可能性のあるインストール、設定および管理の様々な問題のトラブルシューティングに関する情報が含まれています。

## このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、LiveCycle コンポーネントのインストール、設定、管理またはデプロイを担当する管理者や開発者を対象にしています。この内容は、このガイドの読者が次の項目に精通していることを前提としています。

- J2EE アプリケーションサーバー
- Microsoft® Windows®, AIX, Linux または Solaris オペレーティングシステム
- MySQL, Oracle®, DB2® または SQL Server のデータベースサーバー
- Web 環境

## このガイドで使用する規則

このドキュメントで使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

| 名前                | 説明  | デフォルト値   |
|-------------------|---|--|
| [LiveCycle root]  | すべての LiveCycle モジュールで使用するインストールディレクトリ。インストールディレクトリには、Adobe® LiveCycle® Configuration Manager 用のサブディレクトリが含まれます。このディレクトリには、サードパーティのテクノロジーに関連したディレクトリも含まれます。 | Windows :<br>C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES3<br>Linux および UNIX :<br>opt/adobe/adobe_livecycle_es3   |
| [JBoss root]      | (JBoss の自動インストール) LiveCycle を実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。  | C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES3¥jboss   |
| [Adobe_JAVA_HOME] | (JBoss の自動インストール) LiveCycle 自動オプションでインストールされる Java JDK のホームディレクトリ。  | C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES3¥Java¥jdk1.6.0_26  |
| [Workbench_HOME]  | LiveCycle によってインストールされる Workbench のホームディレクトリ。   | Windows (32 ビット版) : C:¥Program Files¥Adobe LiveCycle Workbench ES3<br>Windows (64 ビット版) : C:¥Program Files (x86)¥Adobe LiveCycle Workbench ES3 |

| 名前                | 説明  | デフォルト値  |
|-------------------|---|---|
| [appserver root]  | LiveCycle に含まれているサービスを実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。 | JBoss (Windows) : C:\jboss<br>JBoss (Linux および Solaris) : /opt/jboss<br>WebSphere (Windows) :<br>C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer<br>WebSphere (Linux および Solaris) :<br>/opt/IBM/WebSphere/AppServer<br>WebSphere (AIX) :<br>/usr/IBM/WebSphere/AppServer<br>WebLogic (Windows) :<br>C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3<br>WebLogic (Linux および Solaris) :<br>/opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3 |
| WL_HOME           | WL_HOME 環境変数に指定されている、WebLogic のインストールディレクトリ。      | WebLogic (Windows) :<br>C:\Oracle\Middleware\<br>WebLogic (Linux および UNIX) :<br>/opt/Oracle/Middleware/   |
| [appserverdomain] | WebLogic Server で設定したドメイン。                        | WebLogic (Windows) :<br>C:\Oracle\Middleware\user_projects\domains\base_domain<br>WebLogic (Linux および UNIX) :<br>/opt/Oracle/Middleware/user_projects/domains/base_domain   |

## 追加情報

次の表に、LiveCycle の詳細について参照できるリソースを示します。

| 情報                                   | 参照先   |
|--------------------------------------|---|
| LiveCycle、LiveCycle ソリューションおよび開発ツール  | <a href="#">LiveCycle の概要</a>   |
| LiveCycle のインストールまたはアップグレードのための環境の準備 | <a href="#">LiveCycle のインストールの準備 (シングルサーバー)</a><br><a href="#">LiveCycle のインストールの準備 (サーバークラスター)</a><br><a href="#">LiveCycle ES3 へのアップグレードの準備</a>   |
| LiveCycle のインストール (シングルサーバー)         | <a href="#">LiveCycle の自動インストールおよびデプロイ (JBoss 版)</a><br><a href="#">LiveCycle のインストールおよびデプロイ (JBoss 版)</a><br><a href="#">LiveCycle のインストールおよびデプロイ (WebLogic 版)</a><br><a href="#">LiveCycle のインストールおよびデプロイ (WebSphere 版)</a> |

| 情報                             | 参照先   |
|--------------------------------|---|
| LiveCycle の設定（サーバークラスター）       | <a href="#">LiveCycle アプリケーションサーバークラスターの設定（JBoss 版）</a><br><a href="#">LiveCycle アプリケーションサーバークラスターの設定（WebLogic 版）</a><br><a href="#">LiveCycle アプリケーションサーバークラスターの設定（WebSphere 版）</a>                                  |
| LiveCycle へのアップグレード            | <a href="#">LiveCycle ES3 への自動アップグレード（JBoss 版）</a><br><a href="#">LiveCycle ES3 へのアップグレード（JBoss 版）</a><br><a href="#">LiveCycle ES3 へのアップグレード（WebLogic 版）</a><br><a href="#">LiveCycle ES3 へのアップグレード（WebSphere 版）</a> |
| LiveCycle Workbench 10 のインストール | <a href="#">LiveCycle Workbench 10 のインストール</a>  |
| LiveCycle の一般的な管理タスクの実行        | <a href="#">LiveCycle 管理ヘルプ</a>   |
| LiveCycle に統合できる他のサービスや製品      | <a href="http://www.adobe.com/jp/">http://www.adobe.com/jp/</a>   |
| LiveCycle ドキュメントセット            | <a href="#">LiveCycle ドキュメントセット</a>   |

## サポートの利用方法

ここでは、アドビエンタープライズサポートに問い合わせる前に実行する必要がある手順について説明します。LiveCycle のドキュメントを確認しても問題が解決しない場合は、アドビエンタープライズサポートにお問い合わせください。迅速なサービスの提供のために、次の情報をご用意ください。

- 問題が発生したときにどのような操作をしていましたか。
- 問題を再現できますか。
- 問題が発生したときにエラーメッセージは表示されましたか。その他に何か表示されましたか。
- Internet Explorer で「HTTP エラーメッセージを簡易表示する」チェックボックス（ツール／インターネットオプション／詳細設定）の選択を解除してもエラーが発生しますか。

## 第 2 章：インストールおよびデプロイメントのトラブルシューティング

### インストールに関する考慮事項

LiveCycle のインストール、設定またはデプロイに関する問題が発生した場合は、2 ページの「[追加情報](#)」に示す LiveCycle ドキュメントの手順どおりに作業を行ったかを確認します。

インストールおよび設定をすべてドキュメントどおりに行っている場合は、以降のセクションを参照して、発生している問題に類似の問題があるか確認してください。

関連項目

10 ページの「[インストール、設定およびデプロイメントに関する問題](#)」

37 ページの「[エラーメッセージのトラブルシューティング](#)」

### 必要システム構成に関する考慮事項

#### 一時ディレクトリの容量に関する問題

LiveCycle のインストーラーでは、システム一時ディレクトリに空き容量のないシステムへのインストールはできません。この場合、一時ディレクトリに十分なディスク容量がないことを示すエラーメッセージがコンソールウィンドウに表示されます。

この問題を回避するには、一時ディレクトリの容量を十分に確保してください。システム要件についての詳細は、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ガイドを参照してください。

### Windows Server 2008 上の SharePoint、Documentum および IBM Content Manager Connector での API パフォーマンスの低下

LiveCycle が Windows Server 2008 にデプロイされている場合、Adobe® LiveCycle® Workbench 10 または LiveCycle SDK から Microsoft® SharePoint®、EMC® Documentum® または IBM® Content Manager のサーバーに対してコネクタ API 呼び出しを実行したときのパフォーマンスが低下します。

この問題を回避するには、リポジトリサーバーの TCP Receive Window の自動調整を無効にするか、微調整レベルを highlyrestricted に設定します。

次のいずれかのコマンドを使用します。

```
netsh interface tcp set global autotuninglevel=highlyrestricted
```

または

```
netsh interface tcp set global autotuninglevel=disabled
```

Windows Server 2008 のパフォーマンス向上について詳しくは、**Microsoft Knowledge Base**（サポート技術情報）を参照してください。

## Output サービスのファイルサイズの制限

Output サービスを使用して、UNIX システムでサイズの大きいファイルを生成するには、ファイルサイズの上限を、生成されるファイルのサイズ以上に設定する必要があります。

サイズの大きいファイルから PDF ドキュメントを生成するときに発生するエラーを回避するには、UNIX システムで `/etc/security/limits` の `fsize` の値を、すべてのファイルサイズに対応する大きさの値に変更します。

## アプリケーションサーバーに関する考慮事項

アドビエンタープライズサポートに問い合わせる前に、アプリケーションサーバーの次の設定を確認します。

- **Transaction timeout** : 300
- **Initial heap size** : 1024 以上
- **Maximum heap size** : 2048 MB
- **Prepared statement cache** : 100
- **Database connection pool maximum** :
  - IDP\_DS は 30
  - RM\_DS は 20
- **Database connection pool minimum** :
  - IDP\_DS は 1
  - RM\_DS は 1
- **Connection pool maximum connections** : 50

関連項目

37 ページの「[エラーメッセージのトラブルシューティング](#)」

## Solaris 10 のメモリ要件の設定

Solaris 環境での StuckThread の問題を回避するには、次のメモリ設定を行います。

- `/etc/system` ファイルの `rlim` の値を追加するか大きくする。
- スワップ領域を、RAM の合計の 2 倍以上に設定する。

### rlim の値の変更：

1 `/etc/system` ファイルを見つけて開きます。

2 `rlim` の値を見つけて、次のように変更します。

`set rlim_fd_cur`：プロセスごとのファイル記述子数についての初期上限値（ソフトリミット）。この値を 8192 以上に設定します。

`set rlim_fd_max`：プロセスごとのファイル記述子数についての上限値（ハードリミット）。この値を 8192 以上に設定します（この変更は、デフォルト値が 8192 未満の場合にのみ必要です）。この値を変更するには、スーパーユーザーの権限が必要です。

**注意：**`rlim_fd_max` の値は、`rlim_fd_cur` の値以上にする必要があります。

3 ファイルを保存して閉じます。



- 4 コンピューターを再起動します。

### スワップ領域の追加

- 1 スワップ領域を増やす場合は、スワップ領域の上限の合計が RAM 容量の合計の 2 倍を超えるように指定します。例えば、8 GB の RAM の場合は、16 GB を超えるスワップ領域を設定します
- 2 必要に応じてコンピューターを再起動します。

### 更新された設定の検証：

- 1 新しいシェルを起動します。
- 2 `ulimit -n` と入力して **Enter** キーを押します。
- 3 返される値が、設定した `rlim` の値に一致していることを確認します。
- 4 `swap -s` と入力して **Enter** キーを押します。
- 5 返される値が、新しいスワップ領域の値に一致していることを確認します。

いずれかの値が更新後の設定に一致しない場合は、説明どおりに手順を実行したかどうかを確認し、コンピューターを再起動してください。

## データベースの初期化に関する考慮事項

LiveCycle サーバーの初期化に関する問題が発生した場合は、次の点について問題がないかどうかを確認します。

- データベースインスタンスの名前には、英数字しか使用しない。
- (Linux および UNIX) データベースインスタンスが、プラットフォーム固有のしきい値の 8 文字以下である。

プロセスの最初に初期化が失敗した場合は、以下を確認します。

- (自動インストール以外) LiveCycle データベースが作成されており、ユーザーにそのデータベースに対する適切な権限がある。
- `ping` を実行するとデータベースサーバーにアクセスできる。
- データベースが空であり、テーブル、シーケンス、ビューまたはインデックスが含まれていない。
- IDP\_DS の JNDI 名が作成されている。

詳しくは、46 ページの「[データベースのエラーメッセージ](#)」を参照してください。

### 多数の同時呼び出しへの対応

多数の同時呼び出しを行うと、データベースのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。パフォーマンスの低下を回避するには、データソース (IDP\_DS) の最大接続プールサイズを、予想される (または実際の) 同時呼び出しの数よりも大きくします。

## Trust Store を初期化できない

(SQL Server サーバーのみ) SQLServer ユーザー名 (admin1 など) を作成し、そのデータベースのスキーマ (admin2 など) を作成して、そのスキーマを SQL Server アカウントのデフォルトのスキーマに設定すると、Trust Store は初期化できず、次のようなメッセージが表示されます。

- 00000027 TrustStoreBoo E POF is not installed, Trust Store cannot bootstrap unless POF is installed.

Trust Store を正常に初期化するには、SQLServer ユーザー名 (admin1 など) とデータベーススキーマ名 (admin1 など) が一致するようにします。

## セキュリティに関する考慮事項

### SELinux セキュリティが「enforcing」モードの場合に XMLForm.exe がクラッシュする

NSA Security Enhanced Linux (SELinux) が enforcing モードになっているサーバーでは、LiveCycle の実行中に問題が発生する場合があります。その設定では、XMLForm.exe を呼び出す LiveCycle プロセスは実行されません。ユーザーは関連付けられたフォームを Adobe® LiveCycle® Workspace で開くことができず、アプリケーションサーバーのログファイルには次のようなエラーメッセージが出力されます。

- Service XMLFormService: Process ProcessResource(name=XMLForm.exe,pid=0) terminated abnormally with error code ¥{3¥}

この問題を解決するには、SELinux セキュリティを permissive モードに変更します。

## アップグレードに関する考慮事項

### アップグレード時に Content Services (非推奨) EAR のデプロイに失敗する

**注意:** アドビは、Adobe® LiveCycle® Content Services ES のお客様に、コンテンツリポジトリへの移行をお願いしています。コンテンツリポジトリはモジュール化された最新の CRX アーキテクチャ上に構築されており、この CRX アーキテクチャは、アドビによる Day Software の吸収合併により利用可能になりました。コンテンツリポジトリは LiveCycle Foundation に付属し、LiveCycle ES3 リリース以降で利用できます。

LiveCycle へのアップグレード時に、Adobe® LiveCycle® Content Services 9 (非推奨) EAR のデプロイメントが失敗し、次の例外メッセージが表示されることがあります。

```
SchemaBootstr E org.alfresco.util.LogUtil error Schema auto-update failed  
org.alfresco.error.AlfrescoRuntimeException: A previous schema upgrade failed or was not completed. Revert  
to the original database before attempting the upgrade again.
```

この問題は、LiveCycle データベースに ALF\_BOOTSTRAP\_LOCK テーブルが存在している場合に発生します。

### WebSphere のリソース使用率が高いので EAR のデプロイメントに失敗する

WebSphere Application Server のリソース使用率が高い場合、アップグレード時に Content Services のデプロイメントに失敗することがあります。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

### バックアップからの lccs\_data のコンテンツとデータベースの復元

- 1 データベースのバックアップコピーから、alf および avm で始まる名前のテーブルを復元して、元の Content Services データベースに戻します。
- 2 バックアップコピーからコンテンツストアのルートにあるコンテンツを復元します。

### 合計トランザクション存続時間タイムアウト値の拡張

- 1 WebSphere Administrative Console で、Servers / Server Types / WebSphere application servers をクリックし、サーバー名をクリックします。
- 2 Container Settings / Container Services / Transaction Service をクリックします。
- 3 「Configuration」タブで、「Total transaction lifetime timeout」設定の値を 900 秒に設定します。
- 4 「Apply」または「OK」をクリックします。
- 5 アプリケーションサーバーを再起動します。

### 異なる順序での EAR のデプロイ

もう一度アップグレードを開始します。Configuration Manager で、Content Services EAR をデプロイしてからその他の EAR をデプロイします。

- 1 LiveCycle EAR をデプロイ画面で、adobe-contentservices.ear を選択し、「デプロイ」をクリックします。
- 2 Content Services EAR が正常にデプロイされたら、adobe-contentservices.ear の選択を解除し、その他の EAR を選択して「デプロイ」をクリックします。

### ALF\_BOOTSTRAP\_LOCK データベーステーブルが原因で EAR のデプロイメントに失敗する

LiveCycle データベースに ALF\_BOOTSTRAP\_LOCK テーブルが存在する場合、アップグレード時に Content Services EAR のデプロイメントに失敗することがあります。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 バックアップから lccs\_data のコンテンツとデータベースを復元します。7 ページの「[WebSphere のリソース使用率が高いので EAR のデプロイメントに失敗する](#)」を参照してください。
- 2 LiveCycle データベースから ALF\_BOOTSTRAP\_LOCK テーブルを削除し、アップグレードを再度開始します。
- 3 Content Services EAR をデプロイしてから、その他の EAR をデプロイします。7 ページの「[WebSphere のリソース使用率が高いので EAR のデプロイメントに失敗する](#)」を参照してください。

### アップグレード時に Content Services（非推奨）EAR ファイルが一部のノードにしかデプロイされない

クラスター上の Content Services にアップグレードする場合、Content Services EAR ファイルは最初のノードにデプロイされますが、他のクラスターノードにはデプロイされません。次の 2 つの対処方法でこの問題を解決できますが、それぞれに欠点もあります。内容を確認し、どちらの対処方法が環境に最適かを判断してください。

- アップグレード時、Configuration Manager を使用して Content Services EAR ファイルを設定するとき、LiveCycle のインデックスルートディレクトリに、以前の LiveCycle バージョンで指定した場所と異なる場所を指定します。この対処方法によって、クラスター内のすべてのノードを起動できます。

**注意：**この方法を使用すると、Content Services リポジトリに多数のコンテンツが保存されている場合は、LiveCycle サーバーの起動に時間がかかることがあります。クラスターの各ノードがインデックスの再作成を試行するので、この問題が起きます。

- EAR ファイルのデプロイ時に、クラスターのノードを 1 つだけ起動させるようにし、アップグレードプロセス全体を通して、そのノードにのみ関連する詳細を指定します。この手順によって、LiveCycle サーバーはインデックスの再作成を行わず、インデックスの更新のみを行うようになります。

このノードが正常に起動したら、手動でこのノードのインデックスディレクトリをクラスターのその他のノード (Configuration Manager の実行を予定していないノード) にコピーします。コピーしたら、クラスターのその他のノードを起動します。これで、Content Services EAR ファイルはすべてのクラスターノードに正常にデプロイされます。

**注意：**この対処方法は実装に時間がかかりますが、起動時のサーバーのダウン時間が最小限に抑えられます。

## PDF Generator の考慮事項

次のトピックでは、Adobe® LiveCycle® PDF Generator 10 で発生する問題とその解決方法について説明します。

### Microsoft Office のマクロを実行するための Acrobat の設定

PDFMaker では、管理コンソールの「ファイルタイプごとの設定」でマクロを有効にしている場合でも、PDF Generator で Microsoft Word および Microsoft Excel のドキュメントを PDF に変換する間は、マクロが無効になります。

PDFMaker でマクロが無効になるのを防ぐには、次のレジストリの値を 0 に設定する必要があります。

- **Microsoft Word :**  
HKEY\_CURRENT\_USER\Software\Adobe\Acrobat\PDFMaker\10.0\Word\Settings\DisableMacro
- **Microsoft Excel :**  
HKEY\_CURRENT\_USER\Software\Adobe\Acrobat\PDFMaker\10.0\Excel\Settings\DisableMacro

Acrobat に関する既知の問題について詳しくは、[http://kb2.adobe.com/cps/877/cpsid\\_87775.html](http://kb2.adobe.com/cps/877/cpsid_87775.html) を参照してください。

### MS Office のファイルを PDF 形式に変換するための PDF Generator の設定

一部の LiveCycle ES サーバーで、PDF Generator ES を使用して Microsoft Office アプリケーションのファイルを正常に変換するためには、DCOM の権限ポリシーを変更する必要があるという、既知の問題があります。権限ポリシーを変更しないと、次のエラーメッセージが表示されます。

```
INFO [STOUT] com.jniwrapper.win32.com.ComException: COM object method returns error code: 0x80004005; E_FAIL (Unspecified error)
```

Microsoft のヘルプとサポートサイトのサポート技術情報の記事に必要な手順が記載されています。

### Telnet セッション経由で LiveCycle サーバーにアクセスする場合の既知の問題

Telnet サービスを使用して Windows Server 2008 で実行されている LiveCycle サーバーにアクセスし、バッチスクリプトを使用してアプリケーションサーバーを起動すると、ネイティブドキュメントから PDF への変換がエラーで失敗します。

この問題を回避するには、「デスクトップとの対話をサービスに許可」オプションを選択して Telnet サービスを開始します。Windows Server 2008 でサービスパネルのプロパティを変更するときに、このオプションを選択できます。

## Excel ファイルを PDF ファイルに変換する場合のパスの解決

PDF Generator を使用して Excel ファイルを PDF ファイルに変換するときに、Excel ファイルのヘッダーまたはフッターにファイル名およびパスの関数（&[Path]&[File]）が含まれていると、予期しない結果になる場合があります。ファイルの変換時に、PDF Generator ではファイルを LiveCycle サーバーの一時領域にコピーして、そのコピーに対して変換を行います。そのため、Excel ドキュメント内のファイル名およびパスの関数は、一時ファイル名および一時領域に解決され、生成される PDF ファイルにはそれらの値が表示されます。

## インストール、設定およびデプロイメントに関する問題

### 一般的な問題

#### Configuration Manager がコマンドラインインターフェイスで起動しない

このエラーは、環境変数（自動インストールの場合は ADOBE\_JAVA\_HOME、それ以外の場合は JAVA\_HOME）を設定していないときに発生します。インストールを正常に完了するには、インストーラーおよび Configuration Manager を起動する前に、必要なパラメーターが設定されていることを必ず確認してください。

#### install.bin の起動が Red Hat Enterprise Linux で失敗する

LiveCycle DVD 内の install.bin 実行ファイルを、

Red Hat® Enterprise Linux® で動作しているコンピューターで実行しようとすると、次のエラーメッセージが表示されます。

- /bin/sh:bad interpreter: Permission denied

Red Hat Enterprise Linux が noexec 権限で DVD を自動マウントするので、このエラーが発生します。この問題を解決して LiveCycle のインストールを開始するには、次の手順を実行します。

- 1 次のコマンドを入力して、ドライブのマウントを解除します。

```
umount /media/CDROM
```

- 2 次の操作を実行して、ドライブを手動で再マウントします。

- 次のように、/media フォルダーの下に CDROM という名前のディレクトリを作成します。

```
mkdir /media/CDROM
```

- 3 次のように、/media/CDROM フォルダーに LiveCycle DVD をマウントします。

```
mount /dev/hda /media/CDROM
```

- 4 DVD をマウントしたディレクトリに移動して、./install.bin を実行します。

### 設定に関する問題

#### トルコ語版 Windows Server 2008 で自動高速モードの処理が失敗する

トルコ語版 Windows Server 2008 オペレーティングシステムでは、Configuration Manager の処理が失敗して ALC-TTN-104-002 エラーが発生します。

この問題を回避するには、次の手順を実行してから Configuration Manager を再度実行してください。

- 1 [LiveCycle root]¥configurationManager¥bin フォルダーの ConfigurationManager.bat をエディターで開きます。

- 2 次の JVM 引数を追加します。

```
-Duser.language=en -Duser.country=US
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。

## 意図したものと異なる JDK が Configuration Manager で使用される

複数のベンダーの JDK がシステムにインストールされている場合、Configuration Manager で、PATH 環境変数で指定されたものとは異なる JDK が使用される可能性があります。

この問題を解決するには、ConfigurationManager.exe ではなく ConfigurationManager.bat を使用して Configuration Manager を起動します。



Configuration Manager のログを参照すると、正しい JDK が使用されているかどうかを確認できます。

## デプロイメントに関する問題

### EAR ファイルのデプロイエラー

インストールするサービスやシステム設定によっては、EAR ファイルのデプロイでエラーが発生する場合があります。このエラーが発生した場合は、アプリケーションサーバーの MaxPermSize を増やします。アプリケーションサーバーでこの値を設定する手順について詳しくは、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ドキュメントを参照してください。

### Content Services (非推奨) EAR のデプロイ時に不適切なエラーが報告される

LiveCycle のインストールまたは LiveCycle へのアップグレード時に、システムが必要なシステム構成を満たしていないか、システムの負荷が高い場合は、Content Services EAR のデプロイ時に Configuration Manager から不適切なエラーが報告されます。LiveCycle のインストール時か、LiveCycle 9.x またはそれ以前からのアップグレード時に、この問題が発生することがあります。

また、Configuration Manager のログには、「Failed to make SOAP RPC call: invoke」というエラーメッセージが記録されます。この不適切なエラーが発生すると、結果として Workspace EAR はデプロイされず、Configuration Manager で次の手順に進むこともできません。

このエラーが発生した場合は、次の手順を実行します。

- 1 SOAP 要求タイムアウトがドキュメントごとに正しく設定されていることを確認します。『[LiveCycle のインストールおよびデプロイ \(WebSphere 版\)](#)』ドキュメントの「WebLogic トランザクションのタイムアウトの設定」を参照してください。
- 2 WebSphere Administrative Console で、Content Services EAR のデプロイおよび実行が正しいか確認します。Content Services EAR が正しくデプロイされていることが確認できたら、次のいずれかを実行します。
  - Configuration Manager で、既にデプロイ済みで実行されている EAR の選択を解除し、まだデプロイされていない EAR (この場合は adobe-workspace-client.ear) だけを選択して、「**デプロイ**」をクリックします。
  - WebSphere Administrative Console から、Workspace EAR ファイル (adobe-workspace-client.ear) を手動でデプロイします。この手順が完了したら、Configuration Manager を再実行し、Configuration Manager で EAR のデプロイメント後のタスクを選択します。

**注意：** Configuration Manager で EAR ファイルをデプロイできない場合は、アプリケーションサーバーの管理コンソールから EAR ファイルを手動でデプロイできます。Configuration Manager で EAR ファイルを手動でデプロイして設定タスクを続けるには、次に示す概略に従って作業してください。

- アプリケーションサーバーの管理コンソールから、必要な EAR ファイルを手動でデプロイします。

- 実行中の Configuration Manager のインスタンスを閉じます。
- Configuration Manager を再び起動し、手動で完了した EAR のデプロイメントに続くタスクを選択します。

## 分散型環境への LiveCycle のデプロイ

アプリケーションサーバーインスタンス (WebSphere) または管理対象サーバー (WebLogic) が別のサーバーにあり、デプロイメントマネージャー (WebSphere) または管理サーバー (WebLogic) のサーバーにない場合は、LiveCycle EAR ファイルを手動でデプロイする必要があります。Configuration Manager でデプロイしようとする、デプロイメントの失敗を示すエラーメッセージが表示されることがあります。

Configuration Manager で EAR ファイルをデプロイするときにこのエラーが表示された場合は、次の手順を実行します。

### LiveCycle EAR ファイルをデプロイするには：

- 1 Configuration Manager を終了します。
- 2 EAR ファイルを手動でデプロイします (使用しているアプリケーションサーバー版の『LiveCycle のインストールおよびデプロイ』ドキュメントの「手動デプロイ」の章を参照してください。)
- 3 Configuration Manager を実行し、LiveCycle EAR ファイルのデプロイ後のタスクのみを選択します。

## WebSphere での LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証エラー

LiveCycle コンポーネントのデプロイ時に、次のエラーが表示されることがあります。

```
Component deployment failed validation. Cannot connect to server container
```

この場合、次の手順を実行します。

### 最大トランザクションタイムアウト値と ORB サービス値を大きくするには：

- 1 WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、**Servers / Server Types / WebSphere application servers** をクリックし、右側のウィンドウでサーバー名をクリックします。
- 2 「Container Settings」で、**Container Services / Transaction Service** をクリックします。
- 3 上記のエラーを解決するために、以下のタイムアウト値をすべて大きくします。
  - **Total transaction lifetime timeout** : 1800
  - **Async response timeout** : 1800
  - **Maximum transaction timeout** : 1800
- 4 WebSphere Application Server を再起動します。

## Solaris でのデプロイメントの開始 / 作成に関するエラー

GNU tar ツールをダウンロードし、このツールを使用して、Solaris 環境ですべてのファイルを抽出します。Solaris tar コマンドを使用してファイルを抽出しないでください。Solaris tar コマンドを使用してファイルを抽出すると、次のような、ファイル紛失のエラーが発生することがあります。

```
ERROR[org.apache.catalina.core.ContainerBase.[jboss.web].[localhost].[/invoker]] Exception starting filter ReadOnlyAccessFilter  
java.lang.ClassNotFoundException: org.jboss.invocation.http.servlet.ReadOnlyAccessFilter
```

## アプリケーションサーバーのトラブルシューティング

ここでは、アプリケーションサーバーに関して発生する可能性のある問題について説明し、ログファイルを使用してそれらの問題のトラブルシューティングを行う方法をご紹介します。

## アプリケーションサーバーが起動しない

サーバーが起動しない場合は、以下を確認します。

- アプリケーションサーバーのログファイルを確認します。
- サーバーが既に実行されているかどうかを確認します。実行されている場合、そのまま実行されますが、初期化は失敗します。アプリケーションサーバーを停止して再起動します。
- LiveCycle サーバー用に設定されたポートのうち別のプロセスが使用しているものがあるかどうかを確認します。
- 製造元のマニュアルを参照してください。

## JBoss Application Server に関する問題

## JBoss サーバーの再起動後 Content Services のデプロイメントに失敗する

JBoss Application Server の再起動後に Content Services のデプロイメントが失敗する場合は、Java プロセスおよび mysqld-max-nt.exe を、ウイルス対策ソフトウェアの安全なプロセスのリストに追加します。

ログに出力されるエラーコード 13 は権限拒否エラーです。

## WebLogic Server に関する問題

## EAR ファイルの再デプロイ時に Configuration Manager がハングする

LiveCycle EAR ファイルを再デプロイする際、LiveCycle Configuration Manager がステージの途中でハングし、新しい EAR ファイルのデプロイに失敗する場合があります。

現在デプロイされている EAR ファイルが WebLogic Server により解放されていないときに、この問題が発生することがあります。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 Configuration Manager を停止します。
- 2 更新する LiveCycle EAR ファイルの既存のバージョンを手動で削除します。
- 3 管理用および管理対象の WebLogic Server を停止し、再起動します。
- 4 Configuration Manager を実行し、新しい EAR ファイルをデプロイします。

## WebSphere Application Server に関する問題

## WebSphere でディレクトリツリーを削除する場合の問題

WebSphere のディレクトリツリーを削除できない場合は、パスが長すぎるので削除できない可能性があります。例えば、Adobe® LiveCycle® Rights Management で使用される次のファイルを削除できない場合があります。

```
C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\AppSrv01\installedApps\[machine
name]Node01Cell\LiveCycleES3.ear\rest-webservice.war\WEB-
INF\classes\com\adobe\rightsmanagement\webservices\rest\serialization\objects\RestPolicyInfoSerializer$Po
licyInfoStruct.class
```



この問題を解決するには、ファイルの削除元である場所（この例では、C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\AppSrv01\installedApps）にドライブをマップし、マップされたそのドライブからファイルを削除します。

**コマンドラインからドライブの場所をマップしてファイルを削除するには：**

- 1 削除元である場所にドライブをマップします。次に例を示します。

```
net use L: %<hostname>%C$\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\AppSrv01\installedApps
```

- 2 コマンドラインで、マップされたドライブに移動します。次に例を示します。

```
L:
```

- 3 ファイルを削除します。次に例を示します。

```
del /s /q *
```

- 4 コマンドラインで、元のドライブに戻ります。次に例を示します。

```
C:
```

- 5 ドライブのマッピングを削除します。次に例を示します。

```
net use L: /delete
```

また、パスのディレクトリ名を 1 文字の名前に変更してパスを短くしてから、ファイルを削除することもできます。

## OutOfMemory PermGen space エラー (Solaris 上の WebSphere)

Solaris で WebSphere Application Server を使用している場合は、LiveCycle コンポーネントのデプロイメント中に OutOfMemory PermGen space エラーが発生して Configuration Manager の実行に失敗する可能性があります。

このエラーを回避するには、アプリケーションサーバーの「Generic JVM Arguments」セクションに次のパラメータを追加します。

```
-XX:MaxPermSize=512m
```

アプリケーションサーバーを再起動し、通常どおりに作業を続行します。詳しくは、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ドキュメントを参照してください。

## アプリケーションサーバーが応答停止になる (AIX 上の WebSphere および DB2)

AIX 上の WebSphere および DB2 の設定で、複数のユーザーが Workbench を同時に使用する場合は、ユーザーがアプリケーションをデプロイしようとするとき LiveCycle サーバーが応答停止になることがあります。

このエラーを回避するには、次の手順を実行します。

- 1 テキストエディターで、[Workbench\_HOME]\workbench.ini ファイルを開きます。

- 2 次の行を見つけ、値を 1 に変更します。

```
-Dcom.adobe.workbench.unsupported.service.cache.batch.threads=5
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。

## Contentspace (非推奨) へのアクセス中に NullPointerException が発生する

Adobe LiveCycle Contentspace 9 (非推奨) へのアクセス中に NullPointerException が発生した場合は、アプリケーションサーバーを再起動して Contentspace に再度アクセスしてください。

この問題は WebSphere のみで発生します。

## LiveCycle データベースのトラブルシューティング

ここでは、LiveCycle データベースに関して発生する可能性のある問題について説明し、それらの問題を回避または解決する方法を紹介します。

データベースがブートストラップに失敗する場合は、次の点を確認します。

- データベースに十分なディスク容量があること。
- データベース設定が最低限のデータベース設定要件を満たしていること。データベースのタイプ別の設定要件については、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ドキュメントを参照してください。
- 製造元のマニュアルを参照してください。

**注意：**上記の確認後もデータベース管理者がデータベースのブートストラップを正常に実行できない場合は、直ちにデータベースの製造元に連絡してください。

LiveCycle データベースの継続的な可用性とパフォーマンスを確保するには、次のタスクを実行します。

- パフォーマンスに関する問題について、実行中のデータベースを継続的に監視します。
- データベースの拡張を継続的に監視し、常に十分なディスク容量が使用できるようにします。
- LiveCycle のコンポーネントの使用率を考慮します。使用率の高い Adobe® LiveCycle® Process Management アプリケーションでは、使用率の高い PDF Generator アプリケーションと比べて、データベースの拡張の程度が大きくなります。
- データベースのパフォーマンスについて製造元のマニュアルを確認します。

## IBM DB2 の設定

LiveCycle を DB2 データベースと共に実行しているときにコンピューターが応答を停止した場合は、サーバーログファイルでデッドロック関連のメッセージを確認してください。デッドロック関連のメッセージがログファイルにある場合は、DB2 の設定パラメーターを次のように変更します。

- LOCKTIMEOUT パラメーターを 15 に設定します。
- APPLHEAPSZ、STMTHEAP および SORTHEAP パラメーターの値を 2 倍にします。

設定後に、データベースとアプリケーションサーバーを再起動する必要があります。

## Oracle データベースに表示される古いセッション

特定の LiveCycle SQL 文を使用していると、Oracle データベースで作成された次のような古いセッションが表示される場合があります。

```
select
rowid,
r.id,
r.documentid,
d.id,
(select count(distinct r2.sessionid) from tb_dm_session_reference r2 where r2.documentid=d.documentid)
r2id,
d.documentid, d.sessionid
from tb_dm_session_reference r right join tb_dm_deletion d on ((d.documentid is null) or d.documentid =
r.documentid) and d.sessionid = r.sessionid
```

この問題を解決するには、次を実行する必要があります。

- `-Dcom.adobe.idp.runPurgeDeletions=false` JVM プロパティを使用しているアプリケーションサーバーに追加します。
- 「データベースへのドキュメントの保存を有効にする」コア設定がオフになっていることを確認します。設定を確認するには：
  - 1 LiveCycle 管理コンソールにログインします。
  - 2 設定／コアシステム設定／設定を選択します。
  - 3 「データベースへのドキュメントの保存を有効にする」の選択が解除されていることを確認します。

**注意：**コア設定の「データベースへのドキュメントの保存を有効にする」がオフに設定されていると、システムプロパティは問題のあるクエリーを防ぎます。システムプロパティが設定されていない、またはコア設定の「データベースへのドキュメントの保存を有効にする」がオンに設定されている場合は、防止機構が動作しません。

## ログファイルを使用したトラブルシューティング

ここでは、ログファイルを使用した LiveCycle のトラブルシューティングを説明します。

### LiveCycle ログファイル

デフォルトでは、LiveCycle ログファイルは **[LiveCycle root]** ディレクトリに `install.log` という名前で保存されています。このログファイルは、LiveCycle エラーの分析に役立ちます。また、アドビエンタープライズサポートへのお問い合わせで必要になることがあります。

### Configuration Manager ログファイル

デフォルトでは、Configuration Manager ログファイルは **[LiveCycle root]¥ConfigurationManager¥log** にあり、`lcm.0.log` などの名前が付けられています。このログファイルは、Configuration Manager エラーの分析に役立ちます。また、アドビエンタープライズサポートへのお問い合わせで必要になることがあります。

### ログファイルを使用したアプリケーションサーバーのトラブルシューティング

アプリケーションサーバーのログファイルの情報を利用して、LiveCycle の実装で発生する問題のトラブルシューティングに役立てることができます。ログファイルの情報だけでは問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、詳細ログを有効にしてログの詳細度を上げることができます。詳細ログはトラブルシューティングの場合にのみ有効にしてください。それ以外の場合に有効にすると、システムのパフォーマンスが低下し、ログファイル用に余分なディスク領域が消費されます。

**注意：**詳細ログファイルを使用して問題のトラブルシューティングを行う場合は、アドビエンタープライズサポートと連携して作業を行うことをお勧めします。

### JBoss ログファイル

デフォルトでは、JBoss ログファイルは `boot.log` および `server.log` という名前で、次の場所に保存されています。

- 自動インストール：**[LiveCycle root]**/jboss/server/lc\_turnkey/log
- 手動インストール：**[appserver root]**/server/standard/log

このログファイルは、JBoss Application Server および LiveCycle のエラーの分析に役立ちます。また、アドビエンタープライズサポートへのお問い合わせで必要になることがあります。

ログファイルの情報だけでは問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、[appserver root]/conf ディレクトリ内の log4j.xml ファイルを編集して TRACE ログを有効にし、より詳細なログを出力することができます。

**注意：**編集の前には、必ず [appserver root]/conf ディレクトリ内の log4j.xml ファイルのバックアップを作成しておきます。

#### JBoss で TRACE ログを有効にするには：

- 1 コマンドプロンプトで、[appserver root]/conf ディレクトリに移動します。
- 2 テキストエディターを使用して log4j.xml 設定ファイルを編集します。
- 3 ファイル内で <root> ログエレメントを探し、次のように変更します。

```
<root>
    <priority value="INFO" />
    <appender-ref ref="FILE" />
</root>
```

- 4 <root> ログエレメントの上に、次のテキストを入力します。

```
<category name="org.jboss.ejb">
    <priority value="TRACE" class="org.jboss.logging.XLevel"/>
    <!--Comment the line below if you want to disable tracing -->
    <appender-ref ref="TRACE_FILE" />
    <appender-ref ref="FILE" />
</category>
```

- 5 ファイル内で <appender name="FILE" を探し、次の行のように変更するか、または次の行を入力します。

```
<param name="Threshold" value="DEBUG" />
```

- 6 ファイル内で <!-- A size based file rolling appender を探し、以下の行の appender を貼り付けます。

```
<appender name="TRACE_FILE"
    class="org.jboss.logging.appender.RollingFileAppender">
    <errorHandler class="org.jboss.logging.util.OnlyOnceErrorHandler"/>
    <param name="File" value="${jboss.server.home.dir}/log/trace.log"/>
    <param name="Append" value="false"/>
    <param name="MaxFileSize" value="5MB"/>
    <param name="MaxBackupIndex" value="2"/>
    <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern" value="%d %-5p [%c] %m%n"/>
    </layout>
</appender>
```

- 7 log4j.xml ファイルを保存して閉じます。

#### JBoss で TRACE ログを無効にするには：

- 1 コマンドプロンプトで、[appserver root]/conf ディレクトリに移動します。
- 2 テキストエディターを使用して log4j.xml 設定ファイルを編集します。
- 3 ファイル内で <root> ログエレメントを探し、次のように変更します。

```
<root>
    <priority value="INFO" />
    <appender-ref ref="FILE" />
</root>
```

- 4 <root> ログエレメントの上に、次のテキストを入力します。

```
<category name="org.jboss.ejb">
  <priority value="TRACE" class="org.jboss.logging.XLevel"/>
  <!--Comment the line below if you want to disable tracing -->
  <appender-ref ref="TRACE_FILE" />
  <appender-ref ref="FILE" />
</category>
```

5 ファイル内で `<appender name="FILE"` を探し、次の行のように変更するか、または次の行を入力します。

```
<param name="Threadhold" value="DEBUG" />
```

6 ファイル内で `<!-- A size based file rolling appender` を探し、以下の行の `appender` を貼り付けます。

```
<appender name="TRACE_FILE"
class="org.jboss.logging.appender.RollingFileAppender">
  <errorHandler class="org.jboss.logging.util.OnlyOnceErrorHandler"/>
  <param name="File" value="${jboss.server.home.dir}/log/trace.log"/>
  <param name="Append" value="false"/>
  <param name="MaxFileSize" value="5MB"/>
  <param name="MaxBackupIndex" value="2"/>
  <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern" value="%d %-5p [%c] %m%n"/>
  </layout>
</appender>
```

7 log4j.xml ファイルを保存して閉じます。

## WebLogic ログファイル

デフォルトでは、WebLogic ログファイルは `/var/log/httpd/error_log` にあります。このログファイルは、WebLogic Server および LiveCycle のブートストラップエラーの分析に役立ちます。また、アドビエンタープライズサポートへのお問い合わせで必要になることがあります。

ログファイルの情報だけでは問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、ログファイルでトレースのレベルを指定して、ログの詳細を増やすことができます。これを行うには、`[appserver root]/conf/httpd.conf` ファイルで `LogLevel` パラメーターを変更します。LogLevel により、エラーログ内のエラーメッセージの詳細度が設定されます。LogLevel に設定できる値は、(詳細度が最低から最高の順で) `emerg`、`alert`、`crit`、`error`、`warn`、`notice`、`info`、`debug` です。デフォルトの LogLevel は `warn` です。

**注意：**編集の前には、必ず `[appserver root]/conf/httpd.conf` ファイルのバックアップを作成しておきます。

### WebLogic でデバッグの LogLevel を有効にするには：

- 1 コマンドプロンプトで、`[appserver root]/conf` ディレクトリに移動します。
- 2 テキストエディターを使用して、`httpd.conf` 設定ファイルを編集します。
- 3 ファイル内で `LogLevel` を探し、次のように変更します。

```
LogLevel debug
```

❖ `httpd.conf` ファイルを保存して閉じます。

トラブルシューティングが完了したら、手順 1 ～ 4 を繰り返します (LogLevel は `warn` に変更します)。

## WebSphere ログファイル

デフォルトでは、WebSphere ログファイルは `[appserver root]/logs/server1` にあります。このログファイルは、WebSphere Application Server および LiveCycle のブートストラップエラーの分析に役立ちます。また、アドビエンタープライズサポートへのお問い合わせで必要になることがあります。

ログファイルの情報だけでは問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、WebSphere Administrative Console で `TRACE` ログを有効にしてログの詳細を増やすことができます。

### WebSphere で TRACE を有効にするには：

- 1 WebSphere Administrative Console にログインし、ナビゲーションツリーで **Troubleshooting / Logs and Trace** をクリックし、サーバーのリストで「**server1**」をクリックして、「**Change Log Detail Levels**」をクリックします。
- 2 「**Enable Trace**」を選択し、「**Trace Specification**」ボックスに  
com.adobe.\*=all=enabled:com.adobe.framework.UITools=all=disabled と入力します。

```
[appserver root]/profiles/[profile_name]/logs/[server name]
```

### JVM システム出力ログおよびエラーログの表示

JVM システム出力ログおよびエラーログは、サーバーに関するトラブルシューティングの貴重なツールです。

### JVM システム出力ログおよびエラーログを表示するには：

- 1 WebSphere Administrative Console にログインし、ナビゲーションツリーで、**Troubleshooting / Logs and Trace** をクリックします。
- 2 アプリケーションサーバーの名前をクリックし、「**JVM Logs**」をクリックします。
- 3 「**Runtime**」タブをクリックし、System.out (JVM システム出力ログを表示する場合) または System.err (エラーログを表示する場合) の下の「**View**」をクリックします。いずれかの選択が無効な場合は、「**Configuration**」タブで SystemOut.log や SystemErr.log のファイル名を指定すると表示されます。デフォルトでは、ファイルは次の場所にあります。

```
[appserver root]/profiles/[profile_name]/logs/[server name]
```

### EAR のデプロイメント時、またはサーバーの再起動時に Java core ダンプが表示されないようにするには：

JAVA\_HOME\_32 は環境変数としてのみ設定し、PATH には含めないでください。

### WebSphere サーバーログに「reindexImpl started」というエラーメッセージが繰り返し表示されないようにするには：

Content Services がデプロイされた後に、次のエラーメッセージが繰り返し SystemOut.log に出力されることがあります。

- IndexTransact I org.alfresco.repo.node.index.IndexTransactionTracker reindexImpl reindexImpl started:  
org.alfresco.repo.node.index.IndexTransactionTracker@290c290c

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 WebSphere のナビゲーションツリーで、**Servers / Server Types / Websphere application servers** をクリックします。
- 2 右側のウィンドウに表示されているアプリケーションサーバーをクリックします。
- 3 **Troubleshooting / Change Log Level Details** をクリックします。
- 4 「**Components**」リストで、org.alfresco.repo.node.index.IndexTransactionTracker パッケージに移動します。
- 5 org.alfresco.repo.node.index.IndexTransactionTracker パッケージをクリックし、「**No Logging**」を選択します。
- 6 「**Configuration**」タブと「**Runtime**」タブ、およびクラスター内のすべてのノードについて手順 1 ～ 5 を繰り返します。

### Quartz スケジューラーが生成する「Failed job」というエラーメッセージが繰り返し表示されないようにするには：

いずれかのサービスで SOAP ポートを使用している場合は、クラスター内の各ノードに関する WebSphere ログファイルに、「Failed job」というエラーメッセージが繰り返し出力される問題が発生することがあります。このメッセージは、Quartz スケジューラーで生成されます。

これらのエラーメッセージは、要求を処理していたノードをシャットダウンし、別のノードで保留中のジョブを完了した後でも引き続き出力されます。

この問題を回避するには、管理コンソールを使用して、WebSphere クラスター内のすべてのノードのログ設定を変更します。次のパッケージのログレベルを `severe` に設定します。

- `org.quartz.impl.jdbcjobstore`
- `com.adobe.idp.scheduler.jobstore.DSCJobStoreTX`

## アプリケーションサーバーのトランザクションログファイルの削除

コンポーネントソリューションが何らかの理由でデプロイに失敗した場合、LiveCycle をホストしているアプリケーションサーバーがロールバックトランザクションと判断したトランザクションの回復を試行しますが、その回復に失敗するので、アプリケーションサーバーは再起動しません。この問題を解決するには、アプリケーションサーバーのトランザクションログファイルを探して削除し、アプリケーションサーバーを再起動します。

## 第3章：管理タスクのトラブルシューティング

ここでは、デプロイ済みの LiveCycle 環境や、管理コンソールで発生する可能性がある問題について説明します。また、アドビエンタープライズサポートのご利用方法についても説明します。

**注意：**LiveCycle の使用時に発生することがあるエラーの一覧、その原因およびエラー解決のための対処方法については、[LiveCycle エラーコードリファレンス](#)を参照してください。

**注意：**Configuration Manager では、管理対象サーバーが設定されていない場合、管理サーバーの使用はサポートされません。

### ログインに関する問題

管理コンソールや Workspace Web ページなど、どの Web アプリケーションにもアクセスできない場合には、次の状況について確認します。

- LiveCycle データベーステーブルが作成されており、ユーザーにそのデータベースに対する適切な権限がある。
- ping を実行するとデータベースサーバーにアクセスできる。

**注意：**適切なロールを持つ管理者だけが Workspace アプリケーションにアクセスできます。ロールおよび権限について詳しくは、[LiveCycle 管理ヘルプ](#)を参照してください。

管理者の権限を持つユーザーとして管理コンソールにログインできない場合は、次のタスクを実行します。

- ユーザー ID に Administrator を使用し、上級管理者としてログインを試行します。このユーザーは、他のいずれかの認証プロバイダーに移動する前に、常にローカルデータベースにチェックインします。
- カスタム SPI について、以下に示す状況を確認します。
- 管理者ユーザーにすべての必要なロールがあるかどうかを確認します。LDAP ツリーに管理者の名前がある場合は、LiveCycle のロールが上書きされている可能性があります。アドビエンタープライズサポートにお問い合わせください。

Workspace Web ページにログインできない場合、次の状況について確認します。

- ホストファイルに Workspace サーバー名が含まれている。
- ping を実行すると Workspace サーバーにアクセスできる。
- クライアントと Workspace サーバーのいずれも、ファイアウォールでブロックされていない。
- Workspace サーバー名、JNDI または URL プロバイダーポートが正しく設定されている。

カスタム SPI を使用しており、ログインできない場合、次の状況について確認します。

- config.xml ファイルを調べ、ドメインとその認証プロバイダーとの関連付けが正しいことを確認します。関連付けが正しくないか、または存在しない場合は、ログインの認証が失敗します。ドメインは config.xml ファイルで次のように設定する必要があります。



```
<node name="Domains">
  <map/>
  <node name="<Domain_Name">
    <map>
      <entry key="description" value="any suitable discription"/>
      <entry key="name" value="<Domain_Name>"/>
      <entry key="isLocal" value="true/false"/>
    </map>
    <node name="AuthConfigs">
      <map/>
      <node name="<Profile_Name">
        <map>
          <entry key="authProviderNode"
value="/Adobe/LiveCycle/Config/UM/AuthProviders/<AuthenticationProvider"/>
        </map>
      </node>
    </node>
  </node>
  <node name="DirectoryConfigs">
```

- ドメインではすべて、認証に使用される認証プロバイダーの参照が保持されています。config.xml ファイルにおいて、認証プロバイダーが次のように設定されていることを確認します。

```
<root type="system">
  <map/>
  <node name="Adobe">
    <map/>
    <node name="LiveCycle">
      <map/>
      <node name="Config">
        <map/>
        <node name="UM">
          <map/>
          <node name="AuthProviders">
            <map/>
            <node name="Authentication Provider">
              <map>
                <entry key="configured" value="true"/> SHOULD BE TRUE
                <entry key="visibleInUI" value="false"/>
                <entry key="enabled" value="true"/>
                <entry key="allowMultipleConfigs" value="false"/>
                <entry key="className"
value="com.adobe.idp.um.provider.authentication.CertificateAuthProviderImpl"/> SHOULD BE NON NULL
                <entry key="order" value="5"/>
              </map>
            </node>
          </node>
        </node>
      </node>
    </node>
  </node>
</root>
```

## JBoss 上の管理コンソール内でのサービスページへのアクセス

管理コンソールでサービスページに移動したときにページが空白で表示された場合は、次の対処方法を実行してページが正しく表示されるようにします。

- 1 次のコマンドを使用して、JBoss Application Server を手動で（Windows サービスを使用せずに）起動します。

```
run -b localhost -c <profile name>
```

インストール設定に応じた profile name を使用してください（all、standard、lc\_<dbname> など）。

- 2 C:\windows\system32\drivers\etc... \hosts ディレクトリにある Windows ホストファイルに、サーバーの IP アドレスとホスト名を追加します。

## SSO 認証後もログインページが表示される

SSO が設定され、ユーザーがそれを使用して認証された後にも、Workspace および管理コンソールのログインページが表示されます。

この問題を解決するには、/um/login にフィルターする新しい領域を作成して、ポリシーに追加する必要があります。

### SiteMinder での解決方法の例

SiteMinder 6.0 のこの問題を解決するには、LiveCycle による SiteMinder の設定時に次の手順を実行します。

- 1 /um/login にフィルターする「UM Login」という名前の領域を作成します。すべての認証がこの領域を経由するようになります。
- 2 この新しい領域のルールを作成します。この際、リソースには「\*」を指定します。
- 3 応答プロパティダイアログボックスで、名前に「Auth Response」と指定し、ADB\_USER=<%userattr="cn"%> という値を持つ属性を追加します。
- 4 UM Login をルールとしてポリシーに追加します。

## パフォーマンスに関する考慮事項

LiveCycle でパフォーマンスが低下している場合は、以下について確認してください。

- **同期に関する問題：**多数のスレッドがコードの同じ部分で同時に待機している場合は、混雑した状態が解消してからスレッドダンプを取得します。  
**重要：**スレッドダンプによって JVM が無効になることがあります。
- **外部リソースの処理が遅い：**多数のスレッドが外部ソースから返されるメッセージを待機している場合は、スレッドダンプを取得して、データベースや LDAP サーバーなどのソースを待機しているスレッドを探します。
- **ガベージコレクションの処理が遅い：**verbosegc によって圧縮が頻繁に実行されている場合は、オブジェクトのプールまたはキャッシュを導入してアプリケーションによって生成されるガベージの量を減らします。ログに示される verbosegc のガベージコレクションのサイクルが長い場合は、最大ヒープサイズを小さくします。
- **ユーザーの CPU 使用率が高い：**CPU 稼働率が 75 % 以上の場合は、次のオプションを検討してください。
  - Web コンテナまたは ORB スレッドのプールサイズを小さくする。
  - データベースサーバーのデータベース接続の数を減らす。
  - CPU 使用率が一貫して高い場合は、処理リソースの追加を検討する。
  - CPU がデータベースサーバー上にある場合はデータソースの最大接続の設定を小さくする。

## 管理コンソールの使用中にパフォーマンスが低下する、またはトランザクションタイムアウト例外が発生する

\* 10 で追加 \*

管理コンソールを使用しているとき、多数のファイルを対象として複数の操作を実行すると、パフォーマンスが低下する場合やタイムアウト例外が発生する場合があります。

この問題を解決するには、お使いのアプリケーションサーバーのトランザクションタイムアウト値を大きくしてください。トランザクションタイムアウト値の設定方法については、アプリケーションサーバー製品のマニュアルを参照してください。

## 非同期サービス呼び出し時のパフォーマンス向上

サービスの非同期呼び出し時のパフォーマンスを向上させるには、次の JVM 引数を設定します。

- -Dadobe.work-manager.queue-refill-interval=1
- -Dadobe.workmanager.memory-control.enabled=false

JBoss では、これらの引数を次のファイルに追加します。

- (Windows) run.bat または run.conf.bat ファイル (JBoss インストール設定によって異なります)。
- (UNIX) run.sh または run.conf ファイル (JBoss インストール設定によって異なります)。

WebSphere の JVM 引数の設定について詳しくは、の『[LiveCycle のインストールおよびデプロイ \(WebSphere 版\)](#)』ガイドの「JVM 引数の設定」を参照してください。

WebLogic の JVM 引数の設定について詳しくは、[LiveCycle のインストールおよびデプロイ \(WebLogic 版\)](#)』ガイドの「JVM 引数の設定」を参照してください。

## Pure IPv6 環境のアプリケーションサーバーでリモート呼び出しが失敗する

LiveCycle サーバーが Pure IPv6 環境にデプロイされている場合は、LiveCycle サーバーでのサービスのリモート呼び出しが失敗する可能性があります。これは、クライアントで使用される Sun JDK に関する問題です。このエラーを回避するには、Pure IPv6 環境のアプリケーションサーバーに LiveCycle をデプロイするときに、クライアントで IBM JDK を使用します。

## Oracle 上で Process Management のパフォーマンスが低下する

Oracle データベース用の Process Management スループットが時間の経過とともに低下することがあります。LiveCycle 開発チームでは、この問題の解決に役立つ SQL\*Plus スクリプトをいくつか作成しました。これらのスクリプトを使用すると、ユーザー数が多い状況でのパフォーマンスが改善します。

アドビエンタープライズサポートにお問い合わせいただき、「Oracle 上で Process Management のパフォーマンスが低下する」(ドキュメント ID : [cpSID\\_85089](#)) というタイトルの TechNote に関連するスクリプトを入手してください。

## LDAP を使用した Windows Server のパフォーマンスの向上

検索のための接続では常に特定のドメインの同じ証明書が使用され、コンテキストと関連オブジェクトが明示的に閉じられるので、この接続に接続プールを使用すると、必要なポート数を 50 % まで減らせる可能性があります。

### 接続プールを使用するための Windows Server の設定

- 1 スタート/ファイル名を指定して実行を選択し、「名前」ボックスに regedit と入力して「OK」をクリックし、レジストリエディターを起動します。
- 2 次のレジストリキーに移動します。HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters
- 3 レジストリエディターの右側のウィンドウで、TcpTimedWaitDelay という値の名前を探します。値の名前が表示されない場合は、編集/新規/ DWORD 値を選択して追加します。
- 4 「名前」ボックスに、TcpTimedWaitDelay と入力します。
- 5 挿入ポイントおよび「新しい値 #」がボックス内に表示されない場合は、右側のウィンドウ内を右クリックし、メニューから「名前の変更」を選択し、「名前」ボックスに TcpTimedWaitDelay と入力します。
- 6 MaxUserPort、MaxHashTableSize、MaxFreeTcbs の各値の名前に対して、手順 4 と 5 を繰り返します。

- 7 右側のウィンドウ内をダブルクリックし、**TcpTimedWaitDelay** 値を設定します。「表記」で「**10 進**」を選択し、「**値のデータ**」ボックスに 30 と入力します。
- 8 右側のウィンドウ内をダブルクリックし、**MaxUserPort** 値を設定します。「表記」で「**10 進**」を選択し、「**値のデータ**」ボックスに 65534 と入力します。
- 9 右側のウィンドウ内をダブルクリックし、**MaxHashTableSize** 値を設定します。「表記」で「**10 進**」を選択し、「**値のデータ**」ボックスに 65536 と入力します。
- 10 右側のウィンドウ内をダブルクリックし、**MaxFreeTcbs** 値を設定します。「表記」で「**10 進**」を選択し、「**値のデータ**」ボックスに 16000 と入力します。

**重要：**レジストリエディターまたは別の方法を使用してレジストリを誤って変更すると、重大な問題が発生する場合があります。問題が発生した場合は、オペレーティングシステムの再インストールが必要になる場合があります。レジストリの変更はユーザーの責任で行ってください。

## 非デフォルト JNDI URL の Scheduler サービス設定

(クラスター化されていない環境のみ)

Scheduler サービスが正しく機能するには、いくつかの設定を追加する必要があります。

### JBoss

JBoss で、JNDI URL がアプリケーションサーバーのデフォルトの JNDI URL (JBoss の場合は `jnp://localhost:1099`) と異なる場合、アプリケーションサーバーで管理される IDP\_DS の JNDI URL は次のとおりです。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url
```

- 1 `dscscheduler.properties` という名前の新しいファイルを作成します。
- 2 このプロパティの値を、必要に応じてアプリケーションサーバーノード用に設定します。例えば、次のように設定します。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url =  
    jnp://localhost:1099/  
org.quartz.jobstore.isClustered = true  
org.quartz.scheduler.instanceId = AUTO
```

- 3 JVM 引数 `-Dadobe.idp.scheduler.properties=[Path to this file]/dscscheduler.properties` を、アプリケーションサーバーの起動スクリプトまたは起動設定に追加します。

### WebSphere

WebSphere で、JNDI URL がアプリケーションサーバーのデフォルト JNDI URL (WebSphere の場合は `iiop://localhost:2809`) とは異なる場合、アプリケーションサーバーにより管理される IDP\_DS の JNDI URL は次のとおりです。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url
```

- 1 `dscscheduler.properties` という名前の新しいファイルを作成します。
- 2 このプロパティの値を、必要に応じてアプリケーションサーバーノード用に設定します。例えば、次のように設定します。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url =  
    iop://localhost:2809/  
org.quartz.jobstore.isClustered = true  
org.quartz.scheduler.instanceId = AUTO
```

- 3 JVM 引数 `-Dadobe.idp.scheduler.properties=[Path to this file]/dscscheduler.properties` を、アプリケーションサーバーの起動スクリプトまたは起動設定に追加します。

## WebLogic

WebLogic で、JNDI URL がアプリケーションサーバーのデフォルト JNDI URL (WebLogic の場合は `t3://localhost:7001`) とは異なる場合、アプリケーションサーバーにより管理される IDP\_DS の JNDI URL は次のとおりです。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url
```

- 1 `dscscheduler.properties` という名前の新しいファイルを作成します。
- 2 このプロパティの値を、必要に応じてアプリケーションサーバーノード用に設定します。例えば、次のように設定します。

```
org.quartz.dataSource.idp.java.naming.provider.url =  
    t3://localhost:7001/  
org.quartz.jobstore.isClustered = true  
org.quartz.scheduler.instanceId = AUTO
```

- 3 JVM 引数 `-Dadobe.idp.scheduler.properties=[Path to this file]/dscscheduler.properties` を、アプリケーションサーバーの起動スクリプトまたは起動設定に追加します。

## WebLogic で膨大なログ生成により FileNet API のパフォーマンスが低下する

WebLogic Server にインストールされている LiveCycle では、膨大なログの生成が原因で IBM® FileNet API のパフォーマンスが低下することがあります。そのような場合にパフォーマンスを向上させるには、ログレベルを `debug` から `Fatal` に変更する必要があります。

- 1 FileNet Content Server で、`C:\Program Files\FileNet\Config\samples` ディレクトリに移動します。
- 2 `log4j.properties.client` ファイルを LiveCycle サーバーマシンにコピーし、名前を `log4j.properties` に変更します。
- 3 `log4j.properties` ファイルを開き、`FileNetTraceAppender` と `FileNetTraceRollingAppender` の `appender` のエントリを、次のようにコメントアウトします。

```
### FileNetTraceAppender  
log4j.appender.FileNetTraceAppender=org.apache.log4j.FileAppender  
log4j.appender.FileNetTraceAppender.File=/p8_api_trace.log # This is the layout that the  
TraceLoggingConfiguration framework on the server uses.  
# To use this layout , jace.jar must be present in the classpath.  
#log4j.appender.FileNetTraceAppender.layout=com.filenet.apiimpl.util.TraceLayout # Comment out the  
following lines if using the FileNet TraceLayout  
log4j.appender.FileNetTraceAppender.layout=org.apache.log4j.PatternLayout  
log4j.appender.FileNetTraceAppender.layout.ConversionPattern=%d %5p [%t] - %m\r\n ###  
FileNetTraceRollingAppender  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender=org.apache.log4j.RollingFileAppender  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.File=/p8_api_trace.log  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.MaxFileSize=100MB  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.MaxBackupIndex=1  
# This is the layout that the TraceLoggingConfiguration framework on the server uses.  
# To use this layout , jace.jar must be present in the classpath.  
#log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.layout=com.filenet.apiimpl.util.TraceLayout  
# Comment out the following lines if using the FileNet TraceLayout  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.layout=org.apache.log4j.PatternLayout  
log4j.appender.FileNetTraceRollingAppender.layout.ConversionPattern=%d %5p [%t] - %m\r\n
```

- 次に示すように、FileNet logger を `FATAL` に設定し、`FileNetTraceAppender` と `FileNetTraceRollingAppender` を logger から削除します。

置換前

```
log4j.logger.filenet_error = error, FileNetConsoleAppender,  
FileNetErrorRollingAppender, FileNetTraceRollingAppender
```

置換後

```
log4j.logger.filenet_error = fatal, FileNetErrorRollingAppender
```

- 次に示すように、FileNet API logger を FATAL に設定します。

置換前

```
#log4j.logger.filenet_error.api = warn
```

置換後

```
log4j.logger.filenet_error.api = fatal
```

- 4 log4j.properties ファイルを保存します。
- 5 log4j.properties ファイルを含むフォルダーのパスを、LiveCycle アプリケーションサーバーに配置されている **adobe-component-ext.properties** ファイル内の FileNet Component ID エントリに追加します。WebLogic Application Server の場合、このファイルは [WL\_HOME]/user\_projects/domains/<domain name> にあります。  
  
例えば、log4j.properties ファイルが C:/log4j\_file/log4j.properties に格納されている場合は、adobe-component-ext.properties ファイルに「C:/log4j\_file」を追加します。
- 6 アプリケーションサーバーを再起動します。

## 多数の同時ユーザーが Content Services（非推奨）にアクセスしているときのキャッシュアイテムの有効期限切れ警告

**注意：**アドビは、Adobe® LiveCycle® Content Services ES のお客様に、コンテンツリポジトリへの移行をお願いしています。コンテンツリポジトリはモジュール化された最新の CRX アーキテクチャ上に構築されており、この CRX アーキテクチャは、アドビによる Day Software の吸収合併により利用可能になりました。コンテンツリポジトリは LiveCycle Foundation に付属し、LiveCycle ES3 リリース以降で利用できます。

多数のユーザーが同時に Content Services にアクセスしていると、アプリケーションサーバーログに次の警告メッセージが出力されることがあります。

```
ReadWriteCache W org.hibernate.cache.ReadWriteCache handleLockExpiry An item was expired by the cache while  
it was locked (increase your cache timeout): org.alfresco.repo.domain.hibernate.NodeImpl.properties
```

この問題を解決するには、アプリケーションサーバーの起動スクリプトの次の JVM 引数を、デフォルトのヒューリスティックアルゴリズムではなく、LRU（Least Recently Used）アルゴリズムを使用するように設定して、ehcache を更新します。

```
-Dnet.sf.ehcache.use.classic.lru=true
```

## アンインストールの問題

### JBoss/MySQL サービス、フォルダーおよびファイルの削除

LiveCycle のアンインストール時に JBoss または MySQL の保持を選択した場合、後から ¥ [LiveCycle root]¥Uninstall\_Adobe LiveCycle ES3 フォルダーにあるアンインストールプログラムを使用しても、これらのアプリケーションをアンインストールできないことがあります。

JBoss/MySQL を手動でアンインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 次のコマンドを使用して、「JBoss for LiveCycle 10」または「MySQL for LiveCycle 10」という名前のサービスを削除します。

```
sc delete <service name>
```

- 2 JBoss/MySQL のフォルダーとファイルを削除します。

## 不完全なインストールまたはアンインストールの後に自動モードが無効になる

LiveCycle のインストールまたはアンインストールが失敗すると、インストールの自動モードが使用できなくなります。

この問題を解決するには、「JBoss for LiveCycle 10」または「MySQL for LiveCycle 10」という名前のサービスがシステムに存在するかどうかを確認します。存在する場合は、これらのサービスと関連するレジストリエントリを削除してから、新規自動インストールを開始します。

サービスを削除するには、次のコマンドを使用します。

- `sc delete <service name>`

## 出力エラーのトラブルシューティング

### 出力ファイルが監視フォルダーから変換されない場合がある

LiveCycle サーバー（通常は UNIX で実行されるもの）によっては、関連付けられたすべてのファイルが監視フォルダーにコピーされる前に変換プロセスが呼び出される場合があります。これが原因で、一部のファイルが失われることがあります。この問題を回避するには、監視フォルダー階層の外部にフォルダーを作成して、このフォルダーに必要なすべてのファイルをコピーし、このフォルダー全体を監視フォルダールートにコピーします。

## OutputlVS Printer not found

このエラーが表示される場合は、次の手順を実行します。

- 1 URL（¥¥<servername>¥¥<printername>）で、プリンターのフルネームを指定します。
- 2 プリンターを Windows アカウントに追加してから、JBoss を起動します。
- 3 JBoss が有効なユーザーのコンテキストで実行されるようにします。そのためには、JBoss サービスのプロパティを変更します。「**ログオン**」タブをクリックし、「**アカウント**」を選択します。有効なユーザー名とパスワードを指定し、サービスを再起動して、この変更を有効にします。
- 4 LiveCycle をホストするサーバーには、プリンターにアクセスするための権限が必要です。必要な権限がない場合は、接続に失敗します。

### キャッシュの診断に関する問題

新しいバージョンまたは変更後のバージョンのフォームではなく、古いフォームがキャッシュおよび再利用されている場合は、生成後に予期しない結果になります。この問題を解決するには、次の更新を行ってください。

- 使用するテンプレートが再検証されるようにキャッシュの検証が設定されていることを確認します。更新が行われて、フォームが数秒で再レンダリングされる場合は、再検証のチェックポイント時刻にまだ達しておらず、更新したフォームが取得されない可能性があります。この問題を回避するには、検証方法を「**無条件**」に設定するか、手動でキャッシュをリセットします。

- 一意に生成され、値で渡されるテンプレートに、空の UUID 文字列が含まれていることを確認します。このようなテンプレートは、キャッシュ不可として扱われます。

キャッシュ可能なフォームがあるにもかかわらず、キャッシュによるパフォーマンス上の利点が見られない場合は、次の設定を確認してください。

- LiveCycle Designer 10 の設定で、レンダリングされたフォームのキャッシュが許可されていることを確認します。
- レンダリングのオプションでレンダリングキャッシュの使用が許可されていることを確認します。通常、統合済みの PDF ドキュメントのレンダリングをキャッシュすることはできません。それに対して、クライアントでのレンダリングのフォームは、レンダリングキャッシュによるメリットがあります。
- キャッシュの物理的なディレクトリ構造内でドキュメントのキャッシュ済みテンプレートおよびレンダリングされた要素の検索を行い、フォームが物理的にキャッシュされていることを確認します。
- フォームおよび手動で削除されたフォームの UUID のコピーを作成します。これにより、常にキャッシュを使用しないフォームのバージョンが作成されます。その後、キャッシュされていないバージョンのフォームとキャッシュされたバージョンのフォームのパフォーマンスを比較して、キャッシュによるメリットを確認します。

## クラスター化された WebSphere Application Server をシャットダウンすると出力ファイルが失われる場合がある

クラスターに属する 1 つの WebSphere Application Server をシャットダウンすると、出力されるはずのファイルが失われる場合があります。考えられる原因の 1 つは、シャットダウンに関連する様々な理由で、監視フォルダーからの呼び出し要求がステージングフォルダー内のファイルにアクセスできないことです。

失われたファイルを回復するには、次の手順を実行します。

### ステージングフォルダーからファイルを回復するには：

- 1 ノードを再起動します。
- 2 管理コンソールにログインして、サービス/アプリケーションおよびサービス/エンドポイントの管理を選択します。
- 3 「プロバイダー」リストで「WatchedFolder」を選択し、「フィルター」をクリックすると、監視フォルダーのエンドポイントが表示されます。
- 4 サービス名のエンドポイントに対応するチェックボックスをオンにして、「無効にする」をクリックします。これにより、監視フォルダーで新しいファイルの処理が無効になりました。
- 5 LiveCycle がアクセス可能なすべてのファイルが回復され、処理されるのを待ちます。所要時間は、呼び出される操作の処理に必要な時間と、回復するファイルの数によって変わります。
- 6 ステージングディレクトリに残っているファイルのタイムスタンプを確認して、シャットダウンが原因で失われたファイルに該当する古いファイルを探します。
- 7 該当するファイルを入力ディレクトリにコピーします。
- 8 監視フォルダーを再度有効にして、新しい入力ファイルを処理します。手順 2 ～ 4 を繰り返して「有効にする」を選択します。

## パスワードの暗号化エラー

LiveCycle で連邦情報処理規格 (FIPS) モードが有効になっている場合 (LiveCycle の設定プロセス中に設定、または管理コンソール内部の「コアシステム設定」Web ページで手動で設定)、パスワードの暗号化がドキュメントに適用されません。FIPS が有効なドキュメントでパスワードを暗号化しようとすると、FIPS モードではパスワードを暗号化できないという内容のエラーが表示されます。



## PDF 出力に望ましくないオレンジ色の透かしがある

Microsoft Word ドキュメントから生成される PDF ファイルに、望ましくないオレンジ色の（灰色ではない）透かし「LiveCycle Generator Evaluation」が含まれる場合があります（灰色の透かしはその他の LiveCycle 設定に基づく出力です）。このエラーは通常、同一サーバー上に複数の LiveCycle をインストールすることなどによって、example.ps ファイルが破損した場合に発生します。この問題を解決するには、LiveCycle を実行しているアプリケーションサーバーから、C:\Documents and Settings\%user%\Application Data\Adobe\Adobe PDF\Distiller\Startup\example.ps ファイルを削除して、サーバーを再起動します。クラスター環境では、問題が発生しているすべてのサーバーからこのファイルを削除して、ファイルを削除したサーバーをそれぞれ再起動します。

## ブラウザーキャッシュが HTML レンダリングの障害となる場合

画像（リンク経由または埋め込み画像）への参照を含む XDP フォーム、またはリンクや画像データを持つデータを含む XDP フォームを HTML にレンダリングする場合、ブラウザーキャッシュを無効にして、キャッシュされたデータが画像表示の障害とならないようにする必要があります。

## Windows で「Failure to create directory」エラーが発生する

Windows 環境では、監視フォルダーエンドポイントから PRN ファイルを PDF 形式に変換するとエラーが発生する場合があります。これは、管理コンソールで設定されている Output パラメーターによるものです。

監視フォルダーエンドポイントの Output パラメーターが %E/%F.pdf に設定されていると、元のファイル名拡張子を使用した名前の出力ディレクトリが作成され、変換後のファイルが格納されます（%E はファイル名拡張子、%F はファイル名）。例えば、ファイル example.prn を PDF に変換する場合、ディレクトリが存在しない場合は新しいディレクトリが作成され、そのディレクトリにファイルが格納されます。作成されるディレクトリは、//prn/example.pdf となります。

Windows オペレーティングシステムでは、prn はシステムディレクトリ専用予約されており、これを作成しようとする「Failure to create directory」エラーが発生します。

このエラーを回避するには、PDF エンドポイントに対する PRN ファイルの Output パラメーター値を %E\_/%F or %E\_Files.%F に設定します（[LiveCycle 管理ヘルプ](#)を参照してください）。

## Windows で「Error while converting image to PDF」が発生する

Windows 環境では、画像ファイルを PDF に変換すると、関連するいずれかのエラーが発生する場合があります。このエラーを解決するには、Adobe® Acrobat® Professional 画像変換を使用するように Generate PDF サービスを設定します。

### Acrobat 画像変換を設定するには：

- 1 管理コンソールで、サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動して、「GeneratePDFService: 1.1」をクリックします。
- 2 「設定」タブで、「Use Acrobat Image Conversion (Windows Only)」ボックスに true と入力して、「保存」をクリックします。

## Solaris で OpenOffice.org ファイルから PDF への変換が失敗する

Solaris で長い一時ディレクトリ名を指定すると、タイムアウトエラーが発生して OpenOffice.org ファイルから PDF への変換が失敗する場合があります。一時ディレクトリ名は、最長でも 20 文字にしてください。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 管理コンソールで、設定／コアシステム／コア設定に移動します。

- 2 「一時ディレクトリの場所」フィールドに、短いディレクトリ名を入力します。例えば、/tmp または /usr/temp のように入力します。
- 3 「OK」をクリックします。

## Contentspace でテンプレートを使用した場合の「Content URL 404 error」

Contentspace で doc\_info.php テンプレートを使用すると、「Content URL 404 error」のエラーメッセージが表示される場合があります。このエラーを解決するには、doc\_info.php テンプレート内のコンテンツを置き換えます。

### コンテンツを置き換えるには：

- 1 Contentspace に管理者としてログインし、会社のホーム／データディクショナリ をクリックします。
- 2 右側のウィンドウで、「プレゼンテーションテンプレート」をクリックし、**doc\_info.php** コンテンツアイテムをクリックします。
- 3 **doc\_info.php** ファイルのコンテンツを以下のテキストで置き換えます。

```
<?php

$document = $_ALF_MODEL["document"];

if ($document != null)
{
    ?>

    <h4>Current Document Info:</h4>
    <b>Name:</b> <?php echo($document->cm_name); ?><br>
    <b>Ref:</b> <?php echo($document->__toString()); ?><br>
    <b>Type:</b> <?php echo($document->type); ?><br>
    <b>DBID:</b> <?php echo($document->sys_node_dbid); ?><br>
    <b>Content:</b> <a href="<?php $pos1 = strpos ( $document->url , 'ticket');echo ( substr( $document->url, 0, $pos1 -1 )) ?>"><?php $pos1 = strpos ( $document->url , 'ticket');echo ( substr( $document->url, 0, $pos1 -1 )) ?></a><br>

    <?php
        if ($document->hasAspect("cm_countable") == true)
        {
            ?>

            <b>Counter:</b> <?php echo($document->cm_counter); ?><br>
        }
    <?php
    ?>

    <b>Aspects:</b>
    <table>
    <?php
        foreach ($document->aspects as $aspect)
        {
            ?>

            <tr><td><?php echo($aspect); ?></td></tr>
        }
    <?php
    }
```

```
?>
    </table>

    <b>Properties:</b>
    <table>
<?php
    foreach ($document->properties as $name=>$value)
    {
        echo("<tr><td>". $name. " = ". $value. "</td></tr>");
    }
?>
    </table>

<?php
}
else
{
    echo "No document found!";
}
?>
```

❖ ファイルを保存します。

## Bell Gothic フォントが LiveCycle および Designer でサポートされない

LiveCycle サーバーと Adobe® LiveCycle® Designer 10 のインストールには、Bell Gothic フォントが含まれません。アップグレードを行う場合や、このフォントを使用するフォームがある場合は、システムで使用できるフォントに置き換えるか、アドビストアからこのフォントを購入してください。

**Bell Gothic を使用するフォームが実行時に及ぼす影響：**

**LiveCycle サーバー：**このフォントが LiveCycle サーバーに存在しない場合、生成される PDF 出力ファイルでは、フォントが PDF Generator によって自動的に置き換えられます。

**Designer：**Designer でフォームを開くと、見つからないフォントダイアログボックスが表示され、見つからないフォントの置き換えをユーザーに求めるメッセージが表示されます。

## 「Cannot retrieve the resource from Repository Path」エラー

LiveCycle 9.x または 8.2.1.x からのアップグレード後、LiveCycle リポジトリからの画像の取得中に、次の警告などの例外がサーバーログに出力されます。この例外が発生しても、PDF ファイルは意図したとおりに生成されます。

```
00000041 FormServerExc W com.adobe.livecycle.formsservice.logging.FormsLogger logMessage
```

```
ALC-OUT-002-058: Cannot retrieve the resource from Repository Path. Authority component retrieved is "<somestring>". Path component retrieved is "/somefolder/someimage.jpg". Underlying Exception is : ALC-REP-018-000: Resource [/somefolder/someimage.jpg] does not exist or you do not have sufficient rights to access it.
```

この例外は、リソースがキャッシュされる画像リポジトリの URL で使用している構文が正しくないために発生します。「repository:///」ではなく「repository://」を使用すると、リソースはキャッシュされません。LiveCycle 9.x または 8.2.1.x ではリソースがキャッシュされなかったため、このバージョンのシステムではこの例外が発生しませんでした。

この問題を解決するには、LiveCycle 9.x または 8.2.1.x から移行されたフォーム内に repository:// が指定されている箇所をすべて repository:/// に変更してください。

## その他のエラー

### adobe-lifecycle-websphere.ear のデプロイに失敗する

Windows オペレーティングシステムのローカライズされたインスタンス上で コンポーネントを WebSphere にデプロイする場合、LiveCycle Configuration Manager のデプロイメントプロセスが約 7 %完了したところで adobe-lifecycle-websphere.ear のデプロイに移行するときにエラーが発生します。

この問題を回避するには、次の手順を実行します。

- 1 Configuration Manager を使用して、LiveCycle EAR ファイルを設定します。ただし、デプロイは行いません。
- 2 Configuration Manager を終了せずに WebSphere Administrative Console を開き、サーバー設定から次の JVM 引数を削除します。

```
-Dfile.encoding=utf8
```

- 1 WebSphere を再起動します。
- 2 Configuration Manager で、adobe-lifecycle-websphere.ear ファイルをデプロイします。
- 3 完了したら、WebSphere Administrative Console に戻ります。
- 4 JVM 引数 -Dfile.encoding=utf8 を再度追加します。
- 5 WebSphere を再起動します。
- 6 Configuration Manager に戻り、残りの EAR ファイルをデプロイします。

### 開始および停止スクリプトで、入力がスクリプト内に定義されているのに入力を求めるプロンプトが表示される

コンソール出力では、バインドアドレスおよびポート値のフィールドにデフォルト値が表示されます。値がスクリプト内に定義されている場合、コンソール出力に表示される値ではなく、スクリプト内に定義されている値が使用されます。

Windows では、次の方法で TCP ロケーターのバインドアドレスおよびポート値を指定できます。

- TCP ロケーターのバインドアドレスおよびポートパラメーターの値をスクリプト内に定義する。パラメーターをスクリプト内で定義するには次のようにします。

- 1 編集するスクリプトを開きます。
- 2 バインドアドレスの値を設定します。

```
set bindaddr=<computername or ipaddress>
```

- 3 ポートの値を設定します。

```
set port=<port number>
```

- バインドアドレスおよびポートフィールドの値をコンソール入力で指定する。バインドアドレスのデフォルト値は %computername% で、ポートのデフォルト値は 22345 です。

### アプリケーションモデルの機能を使用できない

管理コンソールの **ECM Connector** の設定画面で、ECM リポジトリを作業用リポジトリとして選択すると、LiveCycle 固有のアプリケーションモデルの機能を使用できなくなります。例えば、LiveCycle アプリケーションを作成、実行または削除できない可能性があります。

ただし、LiveCycle プロセスはこれまでどおりに使用できます。

## 「HTML から PDF」のレベル設定が失われる

管理コンソールの、ホーム／サービス／PDF Generator／ファイルタイプごとの設定／新規／HTML から PDF 画面でのレベル設定が失われます。例えば、レベル設定を「サイトの一部:1 レベル」から「サイトの一部:2 レベル」に変更します。次に、他のオプション（「PDF の最適化」など）をクリックし、「HTML から PDF」を再び展開します。設定した値が「サイトの一部:1 レベル」に変更されています。

この問題を解決するには、この値を再び「サイトの一部:2 レベル」（またはその他の適切な値）に設定し、その直後に「保存」をクリックします。

ただし、「HTML から PDF」セクションを再び展開すると、「サイトの一部:2 レベル」ではなく「サイトの一部:1 レベル」が表示されています。LiveCycle では選択した値が正しく保存されているので、このユーザーインターフェイスの不一致は無視してかまいません。

選択した値が正しく保存されているかどうかを確認する場合は、次のタスクを実行します。

- 1 管理コンソールで、ホーム／サービス／PDF Generator／設定ファイル／設定ファイルを書き出しをクリックして、設定ファイルを書き出します。
- 2 書き出された設定ファイルで、<html2pdfSettings> の下にある <levels> タグの値が正しいことを確認します。

## 一部の画面でローカライズされた文字列ではなく英語のエラーメッセージが表示される

管理コンソールの一部の画面では、ローカライズされた文字列ではなく英語のエラーメッセージが表示されます。この問題を解決するには、ローカライズされたエラーメッセージをサーバー側のコンポーネントで生成するように JVM ロケールを変更します。例えば、JVM ロケールをフランス語に設定するには、次の JVM 引数を追加します。

- -Duser.language=fr -Duser.region=FR-

詳しくは、<http://java.sun.com/developer/technicalArticles/J2SE/locale> を参照してください。

## アプリケーションを削除したときにサーバーログに例外が記録される

Workbench から、プロセスで参照されるデータタイプを含むアプリケーションを削除すると、サーバーログに例外が記録されます。ただし、必要なアプリケーションのデプロイは解除され、アプリケーションは正常に削除されます。このエラーは無視できます。

## 多数の同時スレッドが実行しているときに WebSphere が応答停止になる

Content Services（非推奨）の storeContent 操作が、30 を超えるスレッドで呼び出された場合、WebSphere Application Server が応答停止になる場合があります。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 WebSphere Administrative Console で、Servers／Server Types／WebSphere application servers をクリックし、サーバー名をクリックします。
- 2 右側のウィンドウの「Additional Properties」で、「Thread pools」をクリックします。
- 3 「WebContainer」をクリックし、設定ページで「Maximum Size」フィールドの値を、実行する必要があるスレッド数の 2 倍にします。例えば、40 スレッドを実行する場合は、「Maximum Size」フィールドの値を 80 にします。
- 4 「Apply」または「OK」をクリックします。
- 5 「Save directly to the master configuration」をクリックします。
- 6 WebSphere Application Server を再起動します。

## Asset Manager を使用してオブジェクトを作成したとき WebSphere ログにメッセージが繰り返し出力される

この問題は、Correspondence Management Solution に関連しています。

Asset Manager 構築ブロックを使用してオブジェクトを作成した場合、WebSphere ログに次のメッセージが繰り返し出力されることがあります。

```
ADMLuceneIndexerImpl org.alfresco.repo.search.impl.lucene.ADMLuceneIndexerImpl indexProperty Not indexed:
Content Missing
node: workspace://SpacesStore/aeb5e45f-971f-4f31-8f2b-5ed4f2a15070 at
/{http://www.alfresco.org/model/application/1.0}company_home/{http://www.alfresco.org/model/content/1.0}DataStore/{http://www.alfresco.org/model/content/1.0}ObjectWithExtendedPropertiesMap/{http://www.alfresco.org/model/content/1.0}ObjectWithExtendedPropertiesMap-1282274200933
```

このメッセージが記録されないようにするには、次の手順を実行します。

- 1 WebSphere Administrative Console で、**Servers / Websphere application servers** をクリックし、サーバー名をクリックします。
- 2 「Configuration」タブの「Troubleshooting」で、「**Change Log Level Details**」をクリックします。
- 3 「Runtime」タブをクリックし、「**All Components**」リストを展開します。
- 4 **org.alfresco.repo.search.impl.\*** カテゴリに移動します。
- 5 **org.alfresco.repo.search.impl.lucene.\*** カテゴリをクリックし、**Message And Trace Levels / Warning** を選択します。
- 6 「Apply」または「OK」をクリックし、「**Save directly to master configuration**」をクリックします。

### 関連項目

3 ページの「[サポートの利用方法](#)」

2 ページの「[追加情報](#)」

## FileNet コネクタサービスの開始に失敗する

IBM FileNet の厳密なバージョン 4.0 とは異なる 4.0 ~ 4.5 のバージョン（例：4.0.3）を使用している場合、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
java.lang.Exception: Content Engine/Connection URL specified is invalid -
cemp:http://<server>:<port>/wsi/FNCEWS40DIME?jaasConfigurationName=FileNetP8WSI.
```

次のようにして properties ファイルを編集します。

- 1 adobe-component-ext.properties ファイルをテキストエディターで開き、builtin\_serialization.jar のエントリを削除します。
- 2 サーバーを再起動します。
- 3 管理コンソールで、IBM FileNet コネクタのサービスをすべて開始します。

adobe-component-ext.properties ファイルのデフォルトの場所は次のとおりです。

- JBoss の場合：<Jboss install dir>/bin フォルダー
- WebLogic の場合：<weblogic install dir>/user\_projects/domains/<domain name> フォルダー
- WebSphere の場合：<websphere install dir>/profiles/<profile name> フォルダー

## ホスト名が異なるマシンに LiveCycle を復元する場合の問題

LiveCycle 9.x またはそれ以前から読み込んだプロセスは、Document Form 変数と Submit PDF Form サービスを使用している場合があります。そのようなプロセスがある場合、次の状況では、ユーザーはフォームを送信してタスクを完了することができません。

- 1 プロセスが開始されてから、LiveCycle でのバックアップと復元の一環としてデータベースと GDS のバックアップが実行される。
- 2 LiveCycle が、ホスト名の異なる別のマシンに復元される。GDS ディレクトリ内の backup フォルダーの名前は restore に変更され、データベースが復元されます。
- 3 ユーザーが Workspace でフォームを送信する。

ユーザーがフォームを送信すると、セキュリティ警告ダイアログボックスに「This document has accessed more than one site and might be trying to share data among different locations. This could be a privacy concern. Are you sure you want to continue?」というメッセージが表示されます。「Yes」をクリックすると、「This page cannot be displayed」というエラーメッセージが表示されます。

この問題を回避するには、バックアップからの LiveCycle の復元時に同じホスト名を使用してください。

## PDF ファイルをテキスト形式に書き出した場合に GB18030 文字がピリオドで表示される

PDF ファイルをテキスト形式に書き出した場合に、GB18030 のすべての 4 バイト文字と一部の 2 バイト文字がピリオドで表示されます。

この問題を解決するには、次のようにエンコーディングを設定します。

- 1 Adobe Acrobat を起動します。
- 2 **編集／環境設定**をクリックします。
- 3 「PDF からの変換」カテゴリを選択します。
- 4 「PDF からの変換」列で「テキスト (プレーン)」を選択します。
- 5 「出力ファイルのエンコーディング」を「UTF-8」に設定します。
- 6 Adobe Acrobat を閉じます。

## 第4章：エラーメッセージのトラブルシューティング

ここでは、LiveCycle のログファイルエラーメッセージに関連する問題およびその解決策について説明します。

### 一般的なエラーメッセージ

ここでは、LiveCycle に固有のものではないエラーメッセージと、その原因になっている問題を解決する方法について説明します。

#### OutOfMemoryError

通常、この種類のエラーは、次のいずれかの問題が原因で発生します。

##### 関連項目

37 ページの「[スレッドの不足](#)」

38 ページの「[スレッドおよびメモリの割り当て](#)」

39 ページの「[基本ハードウェアでの Content Services（非推奨）用 Document Management サービスの実行](#)」

#### スレッドの不足

スレッドには様々な種類がありますが、大きく分ければ、Java スレッドおよびネイティブスレッドという 2 つのカテゴリに分類されます。JVM 内で実行されるスレッドは、すべて Java スレッド（Java 内部の `java.lang.Thread` クラス）です。ネイティブコード（C++/C）で作成されるスレッドがネイティブスレッドです。ネイティブスレッドは、オペレーティングシステムによってスケジュールおよび管理されます。これらの 2 つの種類の主な違いは次のとおりです。

- Java スレッドは、LiveCycle コード、アプリケーションサーバーまたは JVM 自体のいずれかによって作成および管理されます。
- オペレーティングシステムツール（`perfmon` または `Task Manager` など）で認識されるのは、ネイティブスレッドのみです。

オペレーティングシステムでは Java スレッドが認識されないため、`perfmon` などのオペレーティングシステムのツールを使用してスレッドを監視する場合は、ネイティブスレッドのみが監視されることになります。Java スレッドの詳細情報を取得する唯一の方法は、Java スレッドダンプを取得することです。Java スレッドダンプを取得するプロセスは、使用するアプリケーションサーバーおよび JVM に応じて異なります。製造元のマニュアルを参照してください。

また、JVM の実装は C/C++ コードで行われ、その JVM コードによって Java スレッドがネイティブスレッドにマップされます。このマッピングは、1:1（1 つの Java スレッドに対して 1 つのネイティブスレッド）か N:1（複数の Java スレッドに対して 1 つのネイティブスレッド）のいずれかになります。このマッピングの詳細な仕組みは JVM のベンダーによって異なりますが、一般的なデフォルトは 1:1 のマッピングです。このマッピングの意味は、各 Java スレッドが、対応する 1 つのネイティブスレッドを持つということです。Java スレッドの数には厳密な制限はありませんが、1:1 のマッピングが一般的であり、かつネイティブスレッドの数には制限があるので、Java スレッドも不足する可能性があります。この制限は、プロセスごと（JVM は単一のプロセス）に適用され、各オペレーティングシステムに応じて異なります。制限は、数千の範囲内（10,000 未満）になるものと想定できます。ただし、この数に関係なく、スレッドが数百の場合でも、オペレーティングシステムはそれだけ多数のスレッドをスケジュールする必要があるため、パフォーマンスの問題が発生します。



## スレッドおよびメモリの割り当て

スレッドに関するもう 1 つの一般的な問題は、メモリの割り当てに関するものです。新しい Java スレッドが割り当てられると、スレッドのスタック用に一定のサイズのメモリが必要になります。このスレッドスタックの容量はパラメーター（Sun™ JVM の `-Xss` オプション）で指定され、デフォルトは約 512KB です。これにより、1,000 個のスレッドがある場合、そのスレッドスタックだけで 500MB のメモリが必要になります。このメモリは、JVM で実行されている他のすべてのメモリ割り当て（LiveCycle による割り当てなど）と競合し、メモリの割り当てに関する問題を引き起こします。

実際には、JVM でメモリの割り当てやスレッドの作成ができない場合、呼び出し元に対して `OutOfMemory` 例外が返されます。この例外には、スタックトレースおよび例外が発生した理由も同時に示されます。この情報は非常に重要で、原因を特定するための詳細な手がかりとなります。

2 つのエラーとそれらに関連付けられた理由コードを表示するメッセージの例を次に示します。

```
"unable to create new native thread: java.lang.OutOfMemoryError: unable to create new native thread
java.lang.OutOfMemoryError: Java heap space"
```

これらのエラーは、次のいずれかの理由により、JVM でそれ以上スレッドを作成できなかったことを示しています。

- プロセスごとのスレッドの制限に達した。
- スレッドスタックを割り当てることができない。

正確な原因を特定するには、スレッドダンプ（「Java ダンプ」とも呼ばれる）を取得する必要があります。通常、スレッドダンプは `javacore.xxxx.txt` という名前で、アプリケーションサーバーのログディレクトリにあります。スレッドダンプ内には多くの情報が含まれていますが、リストの TID: トークン数を数えることで、スレッドの数をすばやく特定できます。一般的なエントリの例を次に示します。

```
"Thread-1227" (TID:0x106948F0, sys_thread_t:0x78996DA0, state:R, native ID:0x191C) prio=5
4XESTACKTRACE at java.net.SocketInputStream.socketRead0(Native Method)
4XESTACKTRACE at java.net.SocketInputStream.read(SocketInputStream.java(Compiled Code))
4XESTACKTRACE at java.io.BufferedInputStream.fill(BufferedInputStream.java(Compiled Code))
4XESTACKTRACE at java.io.BufferedInputStream.read1(BufferedInputStream.java(Compiled Code))
4XESTACKTRACE at java.io.BufferedInputStream.read(BufferedInputStream.java(Compiled Code))
4XESTACKTRACE at com.sun.jndi.ldap.Connection.run(Connection.java(Compiled Code))
4XESTACKTRACE at java.lang.Thread.run(Thread.java:567)
```

スレッドが数千個ある場合、スレッドが不足している可能性が高くなります。明らかな問題がある場合は、開発者がそれらのスレッドのスタックトレースを調べることで原因を特定できます。

**注意：**スレッドダンプの取得は一般には煩わしい作業で、アプリケーションサーバーを後で再起動する必要があります。

スレッド数が数百個の範囲内である場合は、`java.lang.OutOfMemory` エラーの原因はスレッドの制限ではありません。スレッドスタックのサイズ（前述の `-Xss` オプション）を小さくして `LiveCycle` を再実行し、問題が解消されるかどうかを確認してください。

## OutOfMemoryError: Java heap space エラー

`LiveCycle` では、デフォルトのアプリケーションサーバーのトランザクションタイムアウト値より長いトランザクションが必要になる場合があります。例えば、サイズの大きい PDF ドキュメントの処理には、かなり時間がかかることがあります。`Workbench` ユーザーが、サイズの大きいファイルを `Resources` ビューにドラッグした場合に、アプリケーションサーバーログに上記のエラーが表示されることがあります。

アプリケーションサーバーログに `OutOfMemoryError` メッセージが表示された場合は、トランザクションタイムアウト値を増やす必要があります。推奨値は 300 秒（5 分）です。`WebLogic` では、タイムアウト値を `WebLogic Server Administration Console` による「`Job Source`」の設定値より大きくする必要があります。`WebSphere` では、タイムアウト値は最大トランザクションタイムアウトに設定した値より大きくする必要があります。

## JBoss トランザクションタイムアウト値の設定

1 テキストエディターで、`[appserver root]/server/all/conf/jboss.service.xml` を開きます。

- 2 name 属性の値が TransactionTimeout の attribute 要素を探します。

```
<attribute name="TransactionTimeout">300</attribute>
```

- 1 attribute 要素のテキストを、必要に応じて大きな数値に変更します。
- 2 jboss.service.xml を保存します。

### WebLogic トランザクションタイムアウト値の設定

- 1 WebLogic Server Administration Console にログインし、「Domain Structure」で、**Environment** / **Servers** をクリックします。
- 2 右側のウィンドウで、サーバーをクリックし、「**Server Start**」タブをクリックします。
- 3 「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 左側のウィンドウで [domain name] をクリックし、右側のウィンドウで「**JTA**」タブをクリックします。
- 5 「**Timeout Seconds**」ボックスに、300（またはそれ以上）を入力します。
- 6 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

### WebSphere トランザクションタイムアウト値の設定

- 1 WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、**Servers** / **Application servers** / [server name] をクリックします。
- 2 「Container Settings」で、**Container Services** / **Transaction Service** をクリックします。
- 3 「General Properties」の「**Total transaction lifetime timeout**」ボックスに 300（またはそれ以上）と入力します。
- 4 「General Properties」で、「**Maximum transaction timeout**」の値が、「**Total transaction lifetime timeout**」プロパティで指定した値以上になっていることを確認します。
- 5 「**OK**」をクリックします。

## 基本ハードウェアでの Content Services（非推奨）用 Document Management サービスの実行

**注意：**アドビは、Adobe® LiveCycle® Content Services ES のお客様に、コンテンツリポジトリへの移行をお願いしています。コンテンツリポジトリはモジュール化された最新の CRX アーキテクチャ上に構築されており、この CRX アーキテクチャは、アドビによる Day Software の吸収合併により利用可能になりました。コンテンツリポジトリは LiveCycle Foundation に付属し、LiveCycle ES3 リリース以降で利用できます。

Content Services（非推奨）は、パフォーマンスを大幅に向上させる各種メモリ内キャッシュを特長としていますが、大量の Java ヒープメモリを消費します。最小ハードウェア要件だけを満たすハードウェア上で Content Services 用の Document Management サービスを実行すると、OutOfMemory 例外が発生することがあります。

JVM 引数の -Dhibernate.cache.use\_second\_level\_cache=false と -Dhibernate.cache.use\_query\_cache=false を設定することでメモリ使用量を制御できます。

### JBoss Application Server での Content Services メモリ使用量の制御

- 1 テキストエディターで次のファイルを開きます。
  - (Windows) [appserver root]\¥bin¥run.bat または [appserver root]\¥bin¥run.conf.bat (JBoss インストール設定によって異なります)
  - (UNIX) [appserver root]/bin/run.sh または [appserver root]/bin/run.conf (JBoss インストール設定によって異なります)

2 JAVA\_OPTS 行で、次の引数を追加または変更します。

- -Dhibernate.cache.use\_second\_level\_cache=false
- -Dhibernate.cache.use\_query\_cache=false

3 編集したファイルを保存します。

#### WebLogic Server での Content Services メモリ使用量の制御

1 WebLogic Server Administration Console の「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで LiveCycle サーバーの名前をクリックします。

2 「**Configuration**」タブ／**Server Start** をクリックします。

3 「Change Center」で、「**Lock & Edit**」をクリックします。

4 「Arguments」ボックスで、以下の JVM 引数を追加または変更します。

- -Dhibernate.cache.use\_second\_level\_cache=false
- -Dhibernate.cache.use\_query\_cache=false

5 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

#### WebSphere Application Server での Content Services メモリ使用量の制御

1 WebSphere Administrative Console にログインし、ナビゲーションツリーで **Servers / Application servers** をクリックし、右側のウィンドウでサーバー名をクリックします。

2 「Server Infrastructure」で、**Java and Process Management / Process Definition** をクリックします。

3 「Additional Properties」で「**Java Virtual Machine**」をクリックし、「Generic JVM arguments」ボックスで以下の JVM 引数を追加または変更します。

- -Dhibernate.cache.use\_second\_level\_cache=false
- -Dhibernate.cache.use\_query\_cache=false

4 「**Apply**」をクリックして、「**Save directly to the master configuration**」をクリックします。

## 404 File not found

404 File not found エラーが表示された場合、以下について確認します。

- ブラウザーのアクセスログで問題を確認します。
- EAR ファイルが適切にデプロイされていること、およびアプリケーションが初期化されていることを確認します。
- URL の対象が HTTP サーバーの場合は、そのファイルが存在することを確認します。error\_log ファイルまたは error.log ファイルを参照して、Web サーバーが探している完全なファイル名を確認します。
- (JBoss) 大文字と小文字が区別されるので、URL の大文字と小文字が正しいことを確認します。
- (JBoss) JK プラグイン設定の uriworkermmap.properties ファイルで、Web アプリケーションのコンテキストルート (URL の最初の部分) が指定されていることを確認します。
- (JBoss) JSP の場合は、EAR ファイル内にそのファイルが存在することを確認します。この場合、HTTP サーバーのエラーログファイル内にエントリが存在しないことで確認できます。

## Class not found

Class not found エラーが表示される場合は、次のいずれかの問題が発生しているかどうかを確認します。

- クラスパス設定が無効か、存在しない。

- JAR ファイルが古い。
- クラスにコンパイルの問題がある。

## JNDI name not found

例外スタックトレースに `javax.naming.NameNotFoundException: jdbc/<badName>` と示される場合、使用する名前のスペルが正しいことを確認します。正しくない場合は、コードを修正する必要があります。

### 最も一般的な JNDI 例外の修正

- 1 LiveCycle アプリケーションサーバーの JNDI ツリーに、使用する名前が表示されるかどうかを確認します。
  - 名前が表示される場合、最も考えられる原因は、コードでルックアップ用に使用している `InitialContext` オブジェクトが正しく設定されていないので、リソースがリストされている JNDI ツリーがルックアップの対象になっていないということです。正しい設定値については、使用しているアプリケーションサーバー版の『**LiveCycle** のインストールおよびデプロイ』ドキュメントを参照してください。
  - 名前が表示されない場合は、手順 2 に進みます。
- 2 リソースが、JNDI ツリー内でルックアップ時にリストされていない名前の下に表示されるかどうかを確認します。
  - リソースが表示される場合は、使用しているルックアップ名が正しくありません。正しい名前を指定してください。
  - リソースが表示されない場合は、手順 3 に進みます。
- 3 起動時のアプリケーションサーバーログを確認します。アプリケーションサーバーがこのリソースを使用できるように設定されているにもかかわらず問題が発生している場合は、このログに例外が記録されます。例外が発生しているかどうかを確認します。
  - 発生している場合は、例外とスタックトレースを確認します。サーバーログの調査による別の問題として `NameNotFoundException` が発生している場合は、その問題に対応するトラブルシューティングの手順を参照してください。
  - 発生していない場合は、手順 4 に進みます。
- 4 リソースが JNDI ツリーにリストされず、起動時に使用できない理由を示す例外も表示されない場合、問題として考えられるのは、リソースを使用できるようにアプリケーションサーバーが適切に設定されていないことです。アプリケーションサーバー設定を確認します。このリソースを使用できるように設定されているかどうか確認してください。
  - 設定されていない場合、使用しているアプリケーションサーバー版の『**LiveCycle** のインストールおよびデプロイ』ガイドを参照してください。
  - 設定されている場合、この問題の原因は一般的な問題ではありません。アドビエンタープライズサポートにお問い合わせください。

## JBoss Application Server エラーメッセージ

### org.jboss.logging.appender.FileAppender オブジェクトの問題

(既知の問題) JBoss 版の LiveCycle のインストールに ECM Connector for EMC Documentum が含まれている場合は、サーバーを再起動するたびに次のエラーメッセージがサーバーログに出力されます。

An org.jboss.logging.appender.FileAppender object is not assignable to an org.apache.log4j.Appender variable

## IBM FileNet メッセージが JBoss Application Server ログファイルに出力される

IBM FileNet によって生成される不要な ERROR ログメッセージと WARNING ログメッセージが JBoss Application Server ログファイルに出力されないようにするには、[jboss\_root]/server/all/conf にある log4j.xml ファイルを次のように変更します。

- 1 log4j.xml ファイルを検索し、エディターで開きます。
- 2 次のテキストを [Category] セクションに追加します。

```
<category name="com.filenet">
  <priority value="FATAL"/>
</category>
```

- 1 ファイルを保存して閉じます。
- 2 アプリケーションサーバーを再起動します。

## WebLogic Server エラーメッセージ

### WebLogic JTA タイムアウトエラー

次のエラーメッセージが表示された場合、WebLogic タイムアウトに関する問題があります。

```
<Warning> <com.adobe.workflow.AWS> <ap-sun4> <Server_127> <[ACTIVE] ExecuteThread: '17' for queue:
'weblogic.kernel.Default (self-tuning) '> <<anonymous>> <BEA1-58E59A31956BB0D8F0AB> <> <1178316054656>
<000000> <javax.ejb.TransactionRolledbackLocalException: EJB Exception: ; nested exception is:
javax.ejb.TransactionRolledbackLocalException: EJB Exception: ; nested exception is:
weblogic.transaction.internal.TimedOutException: Transaction timed out after 299 seconds
```

この問題を解決するには、WebLogic JTA タイムアウト値を 300 秒より大きい値に設定します（『[LiveCycle のインストールの準備](#)』ドキュメントの「WebLogic トランザクションのタイムアウトの設定」を参照してください）。

### adobe-lifecycle-weblogic.ear のデプロイエラー

次のエラーメッセージが表示された場合、WebLogic EAR のファイルデプロイメントに関する問題があります。

```
Could not start application adobe-lifecycle-weblogic.
com.adobe.lifecycle.cdv.CDVEException[ALC-LCM-030-113]: Failed to deploy EAR.
```

この問題を解決するには、WebLogic Server Administration Console を開き、この機能がロックされていない（「Lock & Edit」ボタンが選択されていない）ことを確認します。ロックされていると、Configuration Manager にはデプロイメントプロセスの完了率が 16 % と表示され、WebLogic Server Administration Console には EAR ファイルがデプロイ済みであるがインストール済みの状態になっていると表示されます。WebLogic Server Administration Console がロックされていない場合、Configuration Manager で EAR ファイルをデプロイできます。

この問題を解決するには、WebLogic Server Administration Console を開いてロックされていないことを確認してから、EAR ファイルを再度デプロイします。

### PermGen space エラーによるデプロイエラー

次のエラーメッセージが表示された場合、WebLogic EAR のファイルデプロイメントに関する問題（Solaris）があります。

```
java.lang.OutOfMemoryError: PermGen space
```

この問題を解決するには、MaxPermSize を 256 から 512 に拡張します。この値は、WebLogic Server Administration Console で変更できます。

## Windows / WebLogic での LiveCycle モジュールのデプロイエラー

Windows 上で動作する WebLogic Server では、5 秒のサーバータイムアウト設定が短すぎるので、LiveCycle モジュールのデプロイに失敗するという既知の問題があります。この設定は、次のように手動で設定する必要があります。

- [appserverdomain] に移動し、エディターで startWeblogic.cmd を開きます。
- 次のパラメーターを追加します。

```
-Dweblogic.client.socket.ConnectTimeout = <timeout value>
```

## WebSphere Application Server エラーメッセージ

### SECJ0305I エラーメッセージ

LiveCycle プロセスで電子メールエンドポイントを使用している場合、電子メールエンドポイントの呼び出し時に次のようなエラーが表示されることがあります。

```
SECJ0305I: The role-based authorization check failed for naming-authz operation  
NameServer:bind_java_object. The user UNAUTHENTICATED (unique ID: unauthenticated) was not granted any of  
the following required roles: CosNamingCreate, CosNamingDelete, CosNamingWrite.
```

このエラーは、WebSphere での CORBA ネーミングサービスグループで必要となる権限がない場合に発生します。

この問題を解決するには、次の手順を実行してください。

- 1 WebSphere Administration Console で、**Environment / Naming / CORBA Naming service groups** を選択します。
- 2 次の権限を追加します。
  - Cos Naming Write
  - Cos Naming Delete
  - Cos Naming Create
- 3 WebSphere Application Server を再起動します。

### エラーログに org.hibernate.StaleObjectStateException のエントリが複数記録される

WebSphere のクラスターデプロイメントでは、エラーログに次のようなエントリが複数記録されることがあります。

```
org.hibernate.event.def.AbstractFlushingEventListener performExecutions Could not synchronize database  
state with session  
org.hibernate.StaleObjectStateException: Row was updated or deleted by another transaction (or unsaved-value  
mapping was incorrect): [org.alfresco.repo.domain.hibernate.NodeImpl#10]  
at org.hibernate.persister.entity.AbstractEntityPersister.check(AbstractEntityPersister.java:1769) at  
org.hibernate.persister.entity.AbstractEntityPersister.update(AbstractEntityPersister.java:2412)  
at  
org.hibernate.persister.entity.AbstractEntityPersister.updateOrInsert(AbstractEntityPersister.java:2312)  
at org.hibernate.persister.entity.AbstractEntityPersister.update(AbstractEntityPersister.java:2612)
```

機能的には問題ありませんが、このようなログが出力されないようにするには、WebSphere Administration Console でログレベルを変更する必要があります。ログレベルを変更するには

- 1 WebSphere Administrative Console にログオンします。
- 2 「Troubleshooting」をクリックし、「Logs and Trace」を選択します。
- 3 右側のウィンドウで、アプリケーションサーバー名をクリックします。
- 4 「Change Log Detail Levels」をクリックします。
- 5 「Configuration」タブで、**All Components / org.hibernate.event.\* / org.hibernate.event.def.\*** を展開します。

- 6 「org.hibernate.event.def.AbstractFlushingEventListener」をクリックします。ポップアップメニューが表示されます。
- 7 このポップアップメニューから、**Message and Trace Levels** / **Fatal** を選択します。
- 8 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。

## adobe-lifecycle-websphere.ear ファイルのデプロイエラー

ここでは、adobe-lifecycle-websphere.ear ファイルをデプロイしようとしたときに次のエラーメッセージが表示された場合に、エラーになったデプロイメントを修正する方法を説明します。

```
Could not deploy adobe-lifecycle-websphere.ear. com.adobe.lifecycle.cdv.CDVException[ALC-LCM-030-112]:  
Failed to deploy EAR. Could not deploy adobe-lifecycle-websphere.ear.
```

### WebSphere のデプロイメントエラーを修正するには：

- 1 コマンドウィンドウで、limit -n コマンドを実行します。
- 2 値 1024 が返された場合は、wasadmin.sh スクリプトでこの値を 2048 に増やす必要があります。
- 3 [appserver root]/bin/wasadmin.sh スクリプトをテキストエディターで開きます。ファイルのコメントブロックヘッダーの後に、ulimit -n 2048 行を追加します。
- 4 WebSphere を再起動し、Configuration Manager を使用して adobe-lifecycle-websphere.ear ファイルをデプロイします。

## J2CA0294W 警告メッセージ

直接 JNDI ルックアップの推奨されない使用法に関する警告メッセージが SystemOut.log ファイルに書き込まれないようにするには、WebSphere ログレベルを変更します。

警告メッセージ「J2CA0294W」が SystemOut.log に書き込まれないようにするには、ログレベルを  
\*=info:com.ibm.ejs.j2c.ConnectionFactoryBuilderImpl=severe に変更します。

### ログレベルの変更

- 1 http://[hostname]:9060/admin の URL を使用して WebSphere Administrative Console にログインし、ナビゲーションツリーで、**Troubleshooting** / **Logs and Trace** をクリックします。
- 2 右側のウィンドウで、アプリケーションサーバーの名前をクリックし、「**Change Log Detail Levels**」をクリックします。
- 3 「Configuration」タブをクリックし、次の文字列を入力します。

```
*=info:com.ibm.ejs.j2c.ConnectionFactoryBuilderImpl=severe
```

- ❖ 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。

## WebSphere インストールでの詳細ログメッセージ

WebSphere のインストール時に複数の不要なログメッセージが記録されないようにするために、ログレベルを「Warning」に上げて、下位のメッセージが記録されないようにすることができます。

- 1 http://[hostname]:9060/admin の URL を使用して WebSphere Administrative Console にログインします。
- 2 ナビゲーションツリーで「**Troubleshooting**」をクリックし、「**Logs and Trace**」を選択します。
- 3 右側のウィンドウで、アプリケーションサーバーの名前をクリックし、「**Change Log Detail Levels**」をクリックします。
- 4 「**Runtime**」を選択し、org.apache.xml.security.\* と入力します。

- 5 「**Message And Trace Levels**」をクリックし、「**Warning**」を選択します。
- 6 「**Save runtime changes to configuration**」チェックボックスをオンにします。
- 7 「**OK**」をクリックします。

## 例外：No trusted certificate found

WebSphere Application Server により、以下に示すような例外が表示されることがあります。

### 管理コンソールに表示される例外：

```
Could not connect to Inbox. Error message: com.ibm.jsse2.util.h:
    No trusted certificate found; nested exception is:
        javax.net.ssl.SSLHandshakeException:
com.ibm.jsse2.util.h: No trusted certificate found
```

### WebSphere Application Server ログファイルに表示される例外：

```
[5/28/08 13:15:30:283 CDT] 00000025 SystemOut      O
CWPKEI0022E: SSL HANDSHAKE FAILURE: A signer with SubjectDN
"CN=imap.gmail.com, O=Google Inc, L=Mountain View, ST=California, C=US"
was sent from target host:port "null:null". The signer may need to be
added to local trust store "D:/servers/websphere6.1/profiles/AppSrv01
/config/cells/MN-TOBIKONode01Cell/nodes/MN-TOBIKONode01/trust.pl2"
located in SSL configuration alias "NodeDefaultSSLSettings" loaded from
SSL configuration file "security.xml". The extended error message from
the SSL handshake exception is: "No trusted certificate found".
[5/28/08 13:15:30:283 CDT] 00000025 SystemOut      O
[5/28/08 13:15:30:283 CDT] 00000025 ExceptionUtil  E
CNTR0020E: EJB threw an unexpected (non-declared) exception during
invocation of method "doSupports" on bean "BeanId(adobe-core-websphere
#adobe-dscf.jar#EjbTransactionCMTAdapter, null)". Exception data:
java.lang.RuntimeException: Could not connect to Inbox. Error message:
com.ibm.jsse2.util.h: No trusted certificate found;
    nested exception is:
        javax.net.ssl.SSLHandshakeException:
com.ibm.jsse2.util.h: No trusted certificate found
```

この問題は、WebSphere のキーストアに必要な証明書が格納されていない場合に発生します。WebSphere のデフォルトのキーストアには、限られた証明書だけが格納されている点に注意してください。WebSphere のキーストアに新しい証明書を追加するには、次の手順を実行します。

### WebSphere のキーストアへの新しい証明書の追加

- 1 電子メールサービスから適切な証明書を取得します。
- 2 証明書を [appserver root]/profiles/[server name]/etc にコピーします。
- 3 WebSphere Administrative Console にログインし、**Security / SSL certificate and key management** をクリックします。
- 4 「**Related Items**」で、「**Key stores and certificates**」をクリックし、「**CellDefaultTrustStore**」をクリックします。
- 5 「**Additional Properties**」で「**Signer certificates**」をクリックし、「**Add**」をクリックします。
- 6 「**Alias**」ボックスに、読み込む証明書の適切なエイリアスを入力します。
- 7 「**File name**」ボックスに、手順<HyperText>2 で証明書をインストールした場所を入力し、「**OK**」をクリックします。
- 8 「**Save directly to the master configuration**」をクリックします。追加した証明書が、署名者の証明書として一覧に表示されます。
- 9 WebSphere Application Server を再起動します。



## Java の NameNotFoundException 例外

WebSphere Application Server 上で User Manager コンポーネントをブートストラップするとき、アプリケーションが起動した後で次の例外メッセージが一度だけ表示されます。

```
00000043 javaURLContext E    NMSV0310E: A JNDI operation on a "java:" name cannot be completed because the
server runtime is not able to associate the operation's thread with any J2EE application component. This
condition can occur when the JNDI client using the "java:" name is not executed on the thread of a server
application request. Make sure that a J2EE application does not execute JNDI operations on "java:" names
within static code blocks or in threads created by that J2EE application. Such code does not necessarily
run on the thread of a server application request and therefore is not supported by JNDI operations on
"java:" names. Exception stack trace:
javax.naming.ConfigurationException [Root exception is javax.naming.NameNotFoundException: Name
comp/env/ejb not found in context "java:".]
```

このエラーは無視してください。

## DSC の呼び出し時の予期しない例外

LiveCycle がデプロイされている WebSphere の同一インスタンスで EAR としてデプロイされている別のアプリケーションが起動するトランザクション内から DSC が呼び出されると、次のエラーメッセージが表示されて DSC の呼び出しが失敗します。

```
LocalException E    CNTR0020E: EJB threw an unexpected (non-declared) exception during invocation of method
"getObjectType" on bean
```

このエラーは、adobe-utilities.jar ファイルが使用され、Platform.UTIL.getTransactionManager() がトランザクションマネージャーを起動するユーザーである場合にのみ WebSphere に対して発生します。

この問題を解決するには、adobe-utilities.jar を使用してトランザクションマネージャーを起動しないようにしてください。その代わりに、次のコードを使用して UserTransaction を作成します。

```
InitialContext initialContext = new InitialContext();
UserTransaction ut = (UserTransaction) initialContext.lookup("java:comp/UserTransaction");
ut.begin();
```

## データベースのエラーメッセージ

ここでは、LiveCycle データベースに関するエラーメッセージについて説明します。

### javax.resource.ResourceException エラー

javax.resource.ResourceException エラーメッセージは、JBoss アプリケーションサーバーの負荷が高い場合に発生します。この問題を回避するには、次のようにしてデータベース接続数を増やします。

- 1 テキストエディターで、[appserver root]¥server¥<profile>¥deploy¥adobe-ds.xml を開きます。
- 2 max-pool-size プロパティの値を 75 に増やします。
- 3 JBoss アプリケーションサーバーを再起動します。

### データベースを複数回初期化すると例外が発生する

既に初期化されている LiveCycle データベースを初期化すると、POF スキーマが初期化されたことを示す例外が発生することがあります。

このエラーは無視してください。

## MySQL の「Too many connections」エラー

負荷が大きい状況では、MySQL により「Too many connections」エラーが生成される場合があります。この問題は、MySQL により許可される並列接続の数を増加させることで解決できます。

- 1 MySQL のインストールディレクトリに移動します。
- 2 my.ini ファイルを探し、エディターで開きます。
- 3 max\_connections パラメーターを探し、必要な値に設定します。デフォルト値は 100 です。
- 4 MySQL を再起動します。

## SQL Server の「J2CA0081E: Method cleanup」エラー

エラー「J2CA0081E: Method cleanup failed while trying to execute method cleanup...」が表示される場合、スタックトレースでは次のように表示されます。

```
"00000057 MCWrapper E J2CA0081E: Method cleanup failed while trying to execute method cleanup on
ManagedConnection WSRdbManagedConnectionImpl@6d826d82 from resource SP_DS. Caught exception:
com.ibm.ws.exception.WsException: DSRA0080E: An exception was received by the Data Store Adapter. See
original exception message: This operation is not supported.. with SQL State : null SQL Code : 0"
```

SQL Server 2005 JDBC Driver 1.2 に更新する必要があります。このドライバーは、Microsoft Download Center から取得してください。

## WebLogic でのデータベース初期化エラー

WebLogic Server 上で LiveCycle データベースを初期化する際に次の例外が発生することがあります。

```
Servlet failed with Exception java.lang.ClassCastException:
weblogic.jndi.factories.java.ReadOnlyContextWrapper at
com.adobe.livecycle.bootstrap.framework.BootstrapServlet.checkDatasource(BootstrapServlet.java:216)
```

この問題を解決するには、IDP\_DS-3079-jdbc.xml ファイルを変更します。

### IDP\_DS-3079-jdbc.xml ファイルの変更

- 1 [appserverdomain]/config/jdbc ディレクトリで IDP\_DS-3079-jdbc.xml ファイルを探し、テキストエディターで開きます。
- 2 <jndi-name></jndi-name> の行を探して削除します。
- 3 ファイルを保存して閉じ、データベースを再度初期化します。

## DB2 サーバーでのメモリに関する問題

DB2 設定ページには次のエラーメッセージが表示されます。

```
SQL1585N A temporary table space with sufficient page size does not exist.
Following is the SQLCODE and SQLSTATE value specific to memory issue on DB2 server.
sqlcode: -1584
sqlstate: 57055
SQL1585N A temporary table space with sufficient page size does not exist.
```

このエラーについての詳細は、[この IBM ナレッジベースの記事](#)を参照してください。

この問題を回避するには、次の手順を実行します。

- システムの RAM を拡張します。『LiveCycle ES3 のインストールの準備』ガイドを参照することをお勧めします。

- 少なくとも 2 GB の容量を各 DB2 インスタンスに割り当てます。Content Services (非推奨) をインストールして DB2 データベースと併用する場合は、LiveCycle データベースをホストするコンピューターに少なくとも 2 GB の RAM が必要です。

## LiveCycle エラーメッセージ

ここでは、LiveCycle のインストールに関するエラーメッセージについて説明します。

### 出力エラーメッセージ

#### JBoss/Windows でネイティブファイルを変換すると異常終了する

Windows オペレーティングシステムで動作する PDF Generator で、ネイティブファイルの変換 (Microsoft Word から PDF への変換など) を行うと異常終了する場合があります。ログファイルには次のような例外が記録されます。

```
INFO [PDF Generator] Application server started as user: SYSTEM
```

この問題は、Microsoft Office、PDF Generator、Acrobat for PDF Generator、およびアプリケーションサーバープロセスで、同じユーザーアカウントを使用しなかった場合に発生します。

この問題を解決するには、JBoss for LiveCycle のユーザーを Microsoft Office のユーザーと同じにします。

#### JBoss for LiveCycle サービスのユーザーの変更

- 1 スタート/コントロールパネル/管理ツール/コンピューターの管理/サービスとアプリケーション/サービスを選択します。
- 2 JBoss for LiveCycle サービスをダブルクリックして、「ログオン」タブを選択します。
- 3 「アカウント」を選択し、Microsoft Office を実行するユーザーの名前とパスワードを入力して、「OK」をクリックします。

#### JBoss/Solaris で HTML ファイルを変換すると異常終了する

Solaris オペレーティングシステムの JBoss 上で動作する PDF Generator で HTMLToPDF 操作または HTMLURLToPDF 操作を使用して HTML ファイルを変換すると、異常終了する場合があります。ログファイルには次のような例外が記録されます。

```
com.adobe.livecycle.generatepdf.client.ConversionException:  
ALC-PDG-052-016-The conversion has timed out.  
at com.adobe.pdfmg.GeneratePDFImpl.htmlURLToPdf
```

この問題は、libiconv.so.2 ライブラリがシステムにない場合に発生します。

この問題を解決するには、/usr/lib ディレクトリの libiconv.so.2 ライブラリをインストールします。

#### UNIX または Linux での XMLForm.exe 権限エラー

次のエラーメッセージが記録された場合は、Adobe® LiveCycle® Forms 10 の UNIX および Linux の権限に関する問題があります。

```
Cannot add execute permission on file /[path_to_XMLForm.exe]
```

この問題を解決するには、UNIX および Linux サーバー上のスワップ領域が 3 GB 以上あることを確認します。

## WebLogic での予期しない EOF エラー

次のエラーメッセージが表示された場合、Forms および Adobe® LiveCycle® Output 10 に問題があります。

```
com.adobe.idp.DocumentError: java.net.SocketException: Unexpected end of
file from server at
com.adobe.idp.Document.passivateInitData(Document.java:867)
```

この問題を解決するには、Document MaxInlineSize パラメーターを、WebLogic Server で定義された IIOP メッセージサイズパラメーターより小さい値に設定します。

## クライアント側のエラーメッセージ

### WebLogic/Solaris での CORBA COMM\_FAILURE 例外

WebLogic Server を Solaris で実行しているときにクライアントからの CORBA COMM\_FAILURE 例外が発生する場合は、クライアント側の JVM に次のプロパティを追加で渡す必要があります。

```
-Dcom.sun.CORBA.transport.ORBTCReadTimeouts=1:60000:300:1
```

太字の値は、ミリ秒単位のタイムアウト値のコロン区切りのリストであり、必要システム構成に従って設定する必要があります。左から右に以下の値を指定します。

- トランスポート TCP の読み取りが 0 バイトを返す場合の初期待機時間
- トランスポート TCP の読み取りが 0 バイトを返す場合の最大累積待機時間
- GIOP ヘッダーのトランスポート TCP の読み取りが 0 バイトを返す場合の最大累積待機時間
- 以降のトランスポート TCP の読み取りが 0 バイトの場合の待機時間を計算するときに使用するバックオフ率

サーバー側の設定は不要です。

## その他のエラーメッセージ

### Locator is already running

TCP を使用してキャッシュを行う場合は、TCP ロケーターの起動時に次の例外が発生する可能性があります。

```
Exception in thread "main" com.gemstone.gemfire.SystemIsRunningException: Locator
"/usr/prod/lbs/domains/lbsdomain/idplib/caching" is already running.
```

```
at com.gemstone.gemfire.internal.ManagerInfo.setManagerStarting
(ManagerInfo.java:65)
at com.gemstone.gemfire.internal.ManagerInfo.setLocatorStarting
(ManagerInfo.java:61)
at com.gemstone.gemfire.internal.DistributionLocator.main
(DistributionLocator.java:87)
at com.gemstone.gemfire.distributed.Locator.main(Locator.java:359)
```

```
[info 2009/08/26 16:18:29.770 PDT <Thread-0> nid=0x15d56d5] Locator stopped
```

この問題を解決するには、caching フォルダーに .locator ロックファイルが存在するかどうかを確認し、そのファイルを削除します。

## com.adobe.idp.DocumentError

一部のクラスターノードからグローバルドキュメントストレージ（GDS）ディレクトリにアクセスできない場合は、次のエラーが発生する可能性があります。

- com.adobe.idp.DocumentError: The document pointing to the file "B:¥lc9\_share¥docm1245494450089¥c5c0f6c0a324c0d45396deb69b6e11db" has expired. Consider increasing the document disposal timeout

この場合は、次のことを確認してください。

- クラスター内のすべてのノードの時刻が同期されている
- すべてのノードから GDS にアクセスできる

この問題が引き続き発生する場合は、ネットワークおよび遅延の問題について確認してください。

## IDPSchedulerService is not in a RUNNING state

Workbench では開始済みの状態になっていても、IDPSchedulerService が再開されません。サーバーログには次の例外が記録されます。

ALC-DSC-020-000: com.adobe.idp.dsc.InvalidStateException: Service: IDPSchedulerService is not in a RUNNING state

Workbench からスケジューラーを再起動する必要がある場合、明示的に IDPSchedulerService を開始して例外の発生を回避してください。

## PDF 変換時の「Failed to delete a directory」警告

PDF への変換時に、次の警告がアプリケーションサーバーログに出力されることがあります。

WARN [Document] DOCS007: Failed to delete a directory

"C:¥DOCU~1¥ADMINI~1¥LOCALS~1¥Temp¥AdobeDocumentStorage¥local¥removeOn2006Y08M31D18h16m15s.1157028375000" after 60 attempts. The file(s) under this directory may still be locked."

常にこのメッセージがログに出力される場合は、サーバーを再起動してください。

## CQ のトラブルシューティング

次のリソースを参照してください。

- <http://dev.day.com/content/kb/home/cq5/CQ5Troubleshooting.html>
- <http://dev.day.com/docs/en/cq/current/howto/troubleshoot.html>
- [http://dev.day.com/docs/en/cq/current/howto/performance\\_monitor.html](http://dev.day.com/docs/en/cq/current/howto/performance_monitor.html)